
異界とあとえーっと・・・～大いなる魂の器～

疾風怒濤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界とあとえーっと・・・大いなる魂の器

【NZコード】

N53670

【作者名】

疾風怒濤

【あらすじ】

高校生、『大神 英司』はある日突然異世界に引き込まれ掛けるが、開き直つてむしろ飛び込んだ。

そこは、剣と魔法な世界の、魔導科学が盛んな先進国家『エルディアス』だった。

地球人の宿命として、チートな能力を手に入れた主人公は、魔導機械に全力を注ぎ込む。

いいの！？

主人公それでいいの！？
作者の趣味全開です。

タイトル変更しました。

第一話 貴様の力はその程度（前書き）

初投稿です！

未熟者ですがよろしくお願いします。

第一話 貴様の力はその程度

突然だが、『俺』こと『大神 英司』は、現在動けなかつた。

・・・日曜日で高校は休み、昼飯を外で食べた後、ぶらぶらしつつ、ふと思いつき、近くの丘に登つてみた矢先の事だつた・・・。

いきなり足元が薄紫に光つたかと思ひと、俺を中心に同じ色に光る、魔方陣のようなモノが展開した。

「なつ！？ ・・・なんじやこりやあああー！？」

・・・思わず叫んでしまつた・・・

魔方陣から出ようとするが、強い力で押さえつけられていよいよつい立つてゐるのがやつとだつた。

まるで、押さえつける力が、俺をそのまま何処かへ押し込もうとしているかのようだ。

「ぐううううううううツ！・・・
く・・・苦しこー！」

「」のままだと押し潰される！？

なんとかしなやつ！・・・

・・・押してダメなら引いてみな？・・・

だつ・・・ダメだ・・・早くなんとかしないと！

くつ・・・一か八かだッ！！

俺は『力』を受け入れるかのように、力むのをやめた。

よし！　いつの『力』を取り込むぐらいの気持ちで行ひつい

「ハアアアアアアツ！！」

ゆっくりと何かが染み込んで来るのがわかる。

「つまづ…？」

・・・まじか！？

正直もう死んだかなーとか思つてた・・・

・・・これが俺の最期のギャグになるのかと思つたんだが・・・

人生なんでも試してみるものだな。

「おっしゃ来ーーーばっちーーー…」

力をためているような、限界まで吐いて止めた息をゆっくり吸うよう、空腹がみたされていくような、不思議な感じがある。

しかし、足りない。

もつと、もつとたくさん入るさすなのこ、少しづつしか流れで来ない。

「もつと・・・もつとだッ！もつと力を、力をよこせええええッ
！」

テンションのままに叫ぶ。
特に意味は無い。

『力』が渦巻きながら引き込まれて行く様をイメージして力を込め
る。

ゴオオオオオオオオオッ！

体の周りで『力』が凄まじい勢いで渦巻いているのがわかる。

まるで川のように『力』が流れ込んで来る。

・・・しかし、未だ足りない。

全くもつて足りない。

「オオオオオオオオッ！…ビリしたあッ！？貴様の力はこの程度の物かあッ！？」

さらに『氣合』いを込めて叫ぶ・・・はたから見ると頭が沸いているようにならぬか見えない・・・

しかし、どんなに取り込もうとしても、一定以上の量の『力』は流れでこない。

「よかねー。ならば、此方から出向いてくれるわあッ！…」

・・・テンションがおかしい。

もはやキチ イだな・・・

そう叫ぶと、『力』の源流を突き止めるかのように、それを追いかけるかのように、イメージを操つていく・・・

ふいに世界が歪み、『大神 英司』は、この世界を去った。

第一話 貴様の力はその程度（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます！
感想もらえると嬉しいです。

第一話 緊急事態（前書き）

キャラの視点と第三者の視点が混ざって分かりにくいのは、単に作者が何も考えていないからです。
すいません。

第一話 緊急事態

『ボク』、『』と『ユーニホール・エストライゼ』は、驚愕していた。

今日は、伯爵でありながら技術者である父、カイゼル・エストライゼの依頼で、大規模な魔獣召喚実験にたちあいにきました。何でも、成功すれば、最強の魔導生物兵器になるそうです。ボクは魔眼持ちだからマナの流れが見えるんです。

「マナコンバータ始動！」

「魔導回路接続！」

「術式、作動します！」

「さあ・・・何が出るかな？」

この大掛かりな仕掛けは、異世界より強力な魔獣を安全に召喚しますが、それがどんな魔獣かは見当もつかないそうです。

「術式が展開しました！……じつやう目標を捕捉したようです！」

厳重に隔離された召喚室の中で、薄紫色の魔方陣が浮かび上がっているのがマスクリーンに映し出されます。

「さあ来い！我が国の平和の礎となるために！」

・・・“ハアハアハア”ゴシ－－！

「！？・・・」り・・・」れはッ－－！」

「どうした！？ 何があった！？」

「も、目標が凄まじい勢いでマナを掌握しています……」このままだと、この国の貯蔵マナが全てが取り込まれかねない勢いです！「そつ！？そんなバカな！？・・・全てだと！？この国が五年はまかなえる量だぞ！？」

「と、停めろ！実験は中止だッ！」

「・・・と、停まりませんッ！ 目標に逆探知されましたッ！
完全に掌握されています！」

「ええいッ！回路を遮断しろ！召喚室を隔絶するんだ！」

「駄目ですーもはや向ひの方が出力が上ですー！」

「あ、あり得ない・・・下手をすれば靈脈が枯れる可能性すらありますーー！」

「なつ・・・なんてことだ・・・」んなことになるなんて・・・

な、なんだかとひとつもなくとんでもない事態になつて来た・・・
も、もしかしたらボクは、この国の終わつをこの手で見ることになるかも・・・

魔眼があるボクには、凄まじいまでのマナのせめきあこと、ひとつ
もない魔力の干渉が見えます・・・

今のボクにできるのは、この出来事を見届けることだけ・・・

・・・つう・・・まだ死にたくないなあ・・・

・・・今までに食べたお菓子と、まだ試してないお菓子が頭の中で
ぐるぐると翻弄する・・・

「まだ・・・まだ死ぬわけにはいかないー！」

ボクにはまだやらなければいけないことがたくさんあるんだーー

ボクは決意を新たにした。

相変わらず周囲は大騒ぎだ。

「捕縛術式と制御術式、停止結界と防御結界、魔法障壁を開設しろ！！

「うなつたらなんとしてでも捕らえるんだ！殺しても構わん！なんとしても奴を止めるんだ！！！」

「了解！」

「術式展開、急げ！　予備も全部出せー。」「迎撃態勢を整えろー！各員に通達！なんとしてでも食い止めるんだ！」

その時、隔離された召喚室の中が、ひときわまばゆく輝いた。

そして次の瞬間・・・今までの事が嘘のように静寂が広がった。

・・・そして、部屋の真ん中に、一つの影がたたずんでいた・・・。

第一話 緊急事態（後書き）

感想とかもらひると嬉しいです！

第三話 ゲット・・・だと? (前書き)

PVが500を超えた！

読んでくれた方、ありがとうございます！

第三話 ゲット・・・だと?

・・・閃光が止み、歪んだ世界が元に戻った。

気が付くと、そこはおかしな金属と石の部屋の中だった。

いつの間にか、かたひざをついてこる。

足元には複雑な幾何学模様が彫りこんであり、奇妙な機械があちこちに埋め込んであった。

とつあえずゆっくりと立ち上がる。

「・・・リリビリヘー」

部屋の中は静まりかえっている・・・

・・・と、その時、唐突にどこから叫び声が聞こえてきた。

この時、外では兵士や研究員達が、

「ま、魔人なのか！？」

とか、

「今だ！今のうちに捕縛術式と制御術式を！！」

とか言つてゐるのだが、この時の英司がそれを知るよしもない。

部屋の中に再び光が満ちる・・・

英司の周りを、囮つよう現れた光の輪が、縮まつてくる。

そして頭上からは怪しげな光が降り注ぎ、英司を包む。

「なつ！？なんだ！？・・・またか！？またなのか！？」

そして輪が英司の体を締め付ける。

「ぐッ！？」

じゃ、ジャマくさい！

それになんかこの光を浴びていると、頭がクラクラする！

英司は、光と光輪から逃れようと、身体に力を込めた。

ブワッ！！

・・・次の瞬間、光と光輪が、あっけなく吹き飛んだ。

それと一緒に、部屋の魔術的な設備も、その負荷に耐えられず吹き飛んだ。

相変わらず部屋の外では、兵士や研究員達が、

「ば、バカなつ！？ 下級龍種まで従えられる設備だぞー！？」

とか、

「ぐッ！ コイツを市街地に入れるわけにはいかん！ 殺せ！」

殺せ！

なんとしてでも食い止めるんだ!」

とか騒いでいたが、勿論英司が知るよしもない。

英司は、ドアからしきとじを見つけて、部屋から出ようとした。

・・・開かない。

しかたがないので蹴つ飛ばしたら、これまたあつけなく吹き飛んでしまった。

ちなみにこの時、外の兵士や研究員達は、

「と、特注の強化ドアがー?」
とか、

「ええい!
バケモノめえツー!」

とか叫んでいるのだが、当たり前の如く英司が知るよしもない。

外に出ると、部屋の周りは、剣や盾、槍、杖などで武装した兵士（
?）達に包囲されていた。

「「ひおッ！？ なんだ！？ なんか用ですかッ！？」

なんで困まれてるんだ！？

そしてなんで監さん」んなに殺氣立つてるんだ！？

兵士（？）達は、

「――！」

・・・などと叫びながら、全員が武器を構え、抜群の「ンビネーション」で襲い掛かつて来た。

「うわあッ！？」

英司は、打ち掛けつて来た武器から、身体を庇おうと咄嗟に腕を交差させた。

すると、
「ヴァンッ！」

といつ音を響かせて、数々の武器が弾き返された。

矢のように飛んでくる攻撃魔術も、当たる前に全て弾け飛んでしまった。

あつ・・・あれ？ 生きてる？・・・

今度こそ絶対死んだと思ったのに・・・

もしかしてここは天国？

「――」

OK理解した、ここは異世界だな！

・・・っちは、まったく・・・現実逃避くらいをせろってんだ！

相変わらず、田の前では武装したオッサン達が凄まじい形相で武器を振るつていい。

うん、こんな天国はイヤだ。

しかし、どうやらオッサン達では俺を傷付ける事が出来ないらしい。

・・・なんで？・・・

・・・まあいいや・・・

「落ち着け！　話せばわかるー！」

「…」

・・・イラッ・・・

取り敢えず、いきなり襲われて若干腹が立つたので退いてもいる。

「・・・フンぬツ！」

バキッ！

「×！？」

なんか叫び声を上げて吹き飛んだ。

そして、腰を据えて拳を繰り出す。

「そオらそらそらそらソラそらそらアツ！
たアツ！？」

ドガガガガガガガガツ！！

ビオしたビオオし

拳が風を斬り、男達が吹き飛んで行く・・・

なんか・・・拳から衝撃波みたいなのが・・・

「テンション上がつてキターフー！」

不思議だがまあ問題無いな！

・・・ 気が付くと、英司は一人、屍（死んでません）の山の中にたたずんでいた。

・・・まさしく『死屍累々』とゆうひつだな・・・

・・・・・い

「ん？」

今なんか聞こえたような？・・・

・・・お・・・・い

「誰だ？」

・・・おーい・・・

・・・さういり今の部屋の中から聞こえてくるひこ・・・

「ハイ、じめんよー？」

のれん風に入つてみる・・・

「・・・聞こえてこらんなら助けてもらいたいのだが・・・」

「ー? 誰かいるのかー?」

「……………」部屋の真ん中じゅうに、

「…………誰もいないだ？」

「真ん中に取つ手が埋まつてゐるじゃらう。」

見ると確かに取つ手がある。

「…………これは…………回して引くのか？」

英司は、それを握んで回しながら引っ張つてみた。

「…………ズロオツ…………」

「おお…………なんか出でた…………」

部屋の中心部から、直径20㌢ぐらいの筒がせりあがつてきた。

あると、

・・・バシュウ・・・

・・・と音がして、前半分がスライドして開く・・・

・・・そこには、蒼い宝玉が埋め込まれた短剣が刺さっていた・・・

「なんだコレ?」

「私の本体じゃー。」

「なつ、なんだってーー?」

「・・・お圭、りあくしょんが軽いのう・・・
まあそれは良いとして、私をここから出してくれんかのう?」

「いや、別にいいけど・・・あなたは何者?」

「私が？私は最高位の大精靈様なのじゃ！」

「精靈！？・・・」の世界、精靈までいんの！？

「・・・フーン・・・じゃあなんでその、最高位の大精靈様が、こんな所におさまってるの？！」

「そ、それは・・・まだ精靈に成り立てだつたころに、拘束・制御術式に捕まつてしまつたのじゃ・・・
それ以来、この宝玉に封じ込められて、あらゆる実験や研究の魔導
こんとろーるのさぼーととやらをやつてゐつちに、いつの間にか位
が上がつていたのじゃ・・・」

「成り立て！？　じゃあその前はなんだつたの！？」

「ふつふつふ・・・聞いて驚け・・・なんと一　若くして死んだ、
天才美人大魔導士だつたのじゃ！？」

「・・・へえ・・・てか人から精靈になれるんだ、へー」

「なつ・・・なんじゃその田はーー?」

本当じやぞーー?

本当に美人で天才な大魔導士だったんじやぞーー?・・・まあ良いわ。
・・取り敢えずこの台座から外してくれい。

そうしたらかわりに私がお主をさぼーとしてやるわー。
精霊契約、精霊の加護とゆうやつじやーー!」

「加護つて・・・何ができるの?」

「例えば、魔術による常時翻訳とか、魔術のせぼーとゆうやつだ
な!

とこうか!」のケースの中はもういつづつなのじやーー!」

・・・なんて便利な・・・

「OK、別に損するわけでもないし、・・・色々サポートしてくれ
れば助かるな!・・・といつわけでこねからよろしくな!」

「つむーー! ひらひらなのじやーー!」

「精霊ゲットだぜ！」

「ゲット！？」

・・・旅の仲間が増えた。

第三話 ゲット・・・だと? (後書き)

ところが、サポートキャラ登場です！
展開によつてはヒロインBあたりになるかもしません

ではまた近いうちにて！

第四話 改めてなりこへと・・・（前編）

今日は追加つてかんじでみじかいです・・・
PVが1200超えてました！
ありがとうございます！

第四話 改めてお会いしてみたい

「……で、やつこえはなんで俺達会話が出来るんだ？」

「私は精霊だから色々なことが出来るのじゃー。」

契約主が会話出来るようにするべからず、朝飯前なのじゃー。」

・・・精霊すばー・・・

「あてよ・・・じがあれの語彙で『じゅ』とか付いてんのはなんだ
ー?」

「この世界の言葉で『× ジャー』『』」

・・・とか言つつかじゅあるまことー?」

「やうこいつ仕様なのじゃー。」

・・・おー精霊テメー・・・

・・・まあいい。

「わい、これからどうしよう・・・」

そう、立て続けに色々あつて流していたが、こゝは異世界なのである。

「すまぬ・・・私がこの呪喚術式を制御していたのじや・・・
そして今の私はあるじを元の世界に還してやる事が出来んのじや・・・
・
あるじには迷惑を掛けてしまつたのう・・・」

「ふむ・・・

それはお前の意思でやつたのかね？」

「いやそれは違うが・・・
「ならそんなに気にすんな、

それに、向こうの世界は退屈で、面白味がなかつたんだ・・・

こんな見たことも無い新世界で暮らせるなら本望だ！

それに・・・そりや確かに1人で放り出されたら困るけど、お前がサポートしてくれるんだろー？

誰もが皆、そんなんじゃないんだ、お前みたいなのがいてくれてラッキーだつたよ。」

「ん、そつか・・・
ならば困った事があつたら何でも私に相談するのじゃぞ？」

「おうよー・・・所でこつまでもお前つて呼ぶのもアレだな・・・
名前はなんでこいつの?」

「・・・ファイア、と呼んでほし」

「了解・・・改めてようしきくな、ファイア

「うむ、アレルギーなのじや」

第四話 改めてやねつへと・・・（後編）

感想も述べると嬉しいです！

第五話 実在するとは思わなかつた（前書き）

PVが2000超えたよわーい！
ありがとうございます！

いまさらですが、不定期です。

第五話 実在するとは思わなかつた

ゴーホールの田の前では、凄まじい光景が繰り広げられていた・・・

騎士や、魔導騎士たちが片端から吹き飛ばされて行く・・・

召喚室から現れたのは、とても珍しい漆黒の髪と田をした少年だった。

現れると同時に、部屋の設備を吹き飛ばし、強化扉を蹴破った。

不思議と敵意は感じなかつた。

・・・優しそうな田をしているが、何を考えているのかはわからない。

しかし、騎士達はいきなり斬り掛けた。

ゴーニールは思わず悲鳴を上げかけた。

・・・しかし、だれひとり少年に傷を負わせることが出来なかつた。

「あ、あれはもじや魔法障壁！？」

あんなに効率悪いのに出しそばなしで全身を覆いながらあんな強度
！？」「

つい説明的なセリフをしゃべってしまつ

少年は何かを話し掛けようとしていたが諦めたらしく、顔付きをガラッと変えると、異世界の言語で雄叫びを上げながら暴れだした・・

・

少年は全ての敵を沈黙させると急に振り返り、何事か喋りながら部屋の中へと戻つていった・・・

・・・・・び、びうひう・・・騎士さん達は全滅しちゃつたし・・・

・・・でもみんな氣絶してるだけみたいだなあ・・・

それに、なんか話し掛けようとしてたみたいだし・・・

最初は敵意もなさそうだったし・・・

二つの間にかみんな居なくなっちゃつたし・・・

・・・ちゅつといわこなぞ話し掛けみよつ・・・

・・・身振り手振りで・・・

などと考えてみると、少年が部屋から出てきた。

よし、まだ！

「あ、あのう・・・」

・・・び、びつよつー！？

つい勢いで話し掛けちゃったけど、何話せばいいんだりー！?
って話せないんだー！？

・・・う・・・帰りたいよう・・・

「む、今度はなんだー！？」

「う、ゴメンなさいー・・・

あれ？

喋ってる…？」

わざわざどうしても話しが通じてないには見えなかつたのに……

「ああ……今ちょうど」の大精靈をまと契約したからな……

ええっ！？

「精靈契約！？」

い、いつの間に！？

てゆーかとつても難しいんだよ！？」

「やうなの？……まあ拾つたようなもんだけどな

「「拾つた！？」」

約一名が衝撃を受けていた。

「つてその短剣が？」

「わかるのか？」

「うん・・・ボクは魔眼持ちだからね・・・」

そう、マナや魔力の流れが見えるのだ。

「なん・・・だと!?

「う、ゴメン・・・気持ち悪いよね・・・」

魔眼は、特に害をなす物ではないのだが、こまだに『見たら呪われる』だのといった迷信、差別や偏見にさらわれることも多ご。

「ボクつ娘だと!?

おいフイア!？　この翻訳はどうなつてやがる!?

・・・この世界にはそんなモノが実在しているといつのかッ!?

「氣にするのはなぜ」のかッ！？」

「や、やつぱり変かな・・・わ、わたしとかのほうがいいかな？？」

・

「お前もかッ！？」

フイアは空氣ガン無視の2人に挟まれて泣きそうだった。

「いや！ 良いと思いまーす！
かわいいと思つよー！」

「かわつー！」

「んでもって魔眼だと！？」

目が金色っぽいのはそれでか・・・
・・・綺麗だな。」「

「あれつー?」

・・・いやそりゃなくて魔眼なんだよ?
不気味じゃない?・・・」

「かっこいいな。

邪氣眼よばわりされないかが心配だが。」

「そ、そつ・・・ならこいナビ」

「い、いいのか・・・」

フイアはなんだか疲れているようだ。

「そ、それで、これからどうするつもりなの?」

「ああ・・・俺らもビーフよつか相談してたところなんだ・・・」

「・・・」J・・・」めんなれ・・・
ボクたちが召喚実験なんかしたばっかりに・・・

「ああそのぐだりはやつれやつたからこいや」

「へ?」

「別に俺を狙つて困らせるためにやつたわけじゃないんだろう?
まあ事情はあとで詳しく聞かせてほしいけど。
まあ元いた世界より楽しそうだし、まだこの世界のこととかわから
ないし、知り合いもファイアの他にいないから助けてくれると助かる。」

「

「うん、うん・・・」Jの実験やつたのはつるのお父さんだし、もうち
ん助けるよー」

「うん、よろしくな!
・・・俺は大神 英司だ。
・・・英司が名前な?」

「うそ、よのしく・・・ハイジ
ボクはホール・エストライヤ
・・・▭てよんではね？」

「ん、めひしへ、▭」

「わて・・・それにしてもこの状況、どうしたものか・・・」

「ふむ・・・私がサポートするから、広域回復魔術でも使ってみた
りビビリやへ」

「おおー。
出来る魔術!ー?」

「ー キジハサカ」

「えつー?」

れつか使ってたんじやないのー?」

「いや、俺のいた世界には魔法がなかつたんだよ。

・・・てかそつか・・・せつき俺がやつてたのは魔術だつたのか・・

・
便利だな魔術！」

「いや普通あんな便利な魔術は無いよ？」

「あるじの膨大な魔力だから」ハジヤ

「そうなのか・・・

それつてもしかしてす」「？」

「凄まじいよ」

「フツ・・・さすが俺！（キラッ）」

・・・ムダにカツコいいポーズをとつて歯を光らせた。

「・・・「んまあ魔力はすいこよねー・・・」

「セツじやな」

「おまえらなんだその田舎っ!」

「「別」」

「なりばよし

・・・それじゃ、やつてみるか」

・・・じゃあ私の短剣にマナを送り込むのじゃ!
術式の構築は私がやるからの!」

「「も

「「つか?」

英司は、短剣を握りしめると、『力』を送り込むようにイメージし

た。

「うむ、行くぞ！」

ブンッ！

と、音を響かせて、短剣の宝玉が輝く。

次の瞬間、足下から青白く光る魔法陣が広がった。

魔法陣はみるみるうちに広がっていき、倒れている全ての人を包んだ。

そして、魔法陣がひときわまばゆく輝いた。

その光がおさまったとき、負傷者は全て回復していた。

「・・・なんて非常識な回復魔術・・・」

「まさかこれほどとはのう・・・」

「さすが俺！」

「・・・あるじよ、何がすごいのかわかつておらんじやうつ・・・」

「効果範囲広いとか？」

「それもだけど・・・回復魔術ってのは、対象の治癒力に上乗せず
る程度のモノなんだよ・・・」

それをこの規模で全快させるなんて・・・それも一瞬で・・・
これを非常識といわざしてなんていうのを・・・」

「そりか・・・オラわくわくしてきたぞーー！」

「・・・なんかもついいや・・・」

「つむ、気にしたら負けじゃな」

「なんだ?」

・・・英司は1人不思議そうにしていた。

第五話 実在するとは思わなかつた（後書き）

はい！まさかのボクつ娘でした！

男だと思いました？

・・・え？気付いてました？

あ、あざとこどすとー！？

・・・まあやれやれといとい。

いやなんか異世界モノのヒロインとこつと、『青髪ロング』が多い
といつイメージがあつたのですが・・・

とこつわけで金髪ショートのボクつ娘が登場です。

今のところメインヒロインな予定ですかが、どうなるかはわかりません。

・・・なんでボクつ娘にしたかつて？

それは、『ローランド』、ロンさんの【『ねづやめ機能』歌つた】を聴いた時、「ボクつ娘、アリだな！」・・・と、思つたからです。

あれは凄まじい中毒性ですね。

ではまた。

第六話 オッセでセセセ（前編）

読んでください。たぬわんー。

どいりもあいがとひやるこまくー。

遅くなひじめんなむー。

実は、前回のすぐ後六話を書いたのですが、これ話しが飛びすぎだな。
・・とこひじとど、一話あいだにはさんだりしました。

その分、一気に更新だぜー！

・・・と、行きたいといひですが、現在チェック中です。

では。

第六話 オッセモセモじゅない

その後、ヨニが周りをとりなしてくれて、なんとか丸く収まった。

たすがは伯爵の娘と言つたところだなー！

そしてその後、研究者や伯爵に会つてから、皇帝に謁見する事に決
ました。

この国は、一応『帝国』なのだそうな。

リアル皇帝を見るのは初めてなので、楽しみだなー。

まずは、研究所の人達。

なんか、元いた世界の話を色々きかれたけど、めんどくさかったので、適当にはぐらかした。

次に、ユーの父親、カイゼル・エストライゼ伯爵に会った。

「突然異世界に召喚してしまい、申し訳ない事をしたな。すまない。」

「あー……いえ、確かに困つたけど、……俺が元居た世界より面白そうだし、帰る方法が見つかるまで、この世界を見て回れたらな、と思ってますよ。」

「そ、そうか……
前向きだな。」

「はっはっは
それほどでも…」

「う、うむ……これまでの間の生活は、私が保証します。」

「えっ？ ……あ、あいつがといづるこ出す。」

「…………想はこつたい何者なのだね？
なんとゆう種族なのだろうか？ ……
…………聞かせてほくれないかね？」

「いや、俺は人間ですが。」

このやつさんは真顔で句を言へ出すやつ……

「いやしかしその魔力は……
ハツ！？ ……もしや魔王なのかー？」

「こやこやこやー

俺、向こうの世界では普通に学生ひつていましたからー。」

「学校に通っていた、となれば、やはりそれなりな身分の生まれでは！？」

「いや違いますって……
俺のいた世界じゃ、義務教育って叫って、子供は皆、学校行って勉強する義務があるんですよ。」

「ほう！　それは素晴らしい制度だ。
勉強とは、何をやるのかね？」

「それは勿論魔王になる為の勉強やアッ……！」

「ぬおオツー！　やはつ魔王につらなる者であつたかあツー！？
者共、曲者じやあツー！
であえ、であえハーツー！」

・・・とまあ冗談はさておき。」

「ええ。　普通に一般教養とかを学びますね。」

「「「「だあああああッ！」」」

・・・衛兵達が派手にずつこけていた。

第六話 オッセでせむじやなご（後編）

おまかのわからオッセんでしたね！

でさまた近い「ひね」。

第七話 謙つたなー? 誰とは言わなこか、謙つたなッー? (前書き)

やつこへば 274000 購えていました!

わー もびっくりだぜー!

感謝です!

第七話 謀つたな！？ 誰とは言わないけど、謀つたなッ！？

俺は、皇帝陛下に謁見する為に、カイゼル伯爵とヨーと一緒に、皇室まで来ていた。

とは言つても、この研究所は皇城の敷地内・・・といつか繋がつており、時間はかかるない。

なんでも、こんな事は色々な意味で前代未聞だそうな。

皇室は凄まじいところだな。

なんか皆が跪いたり、口上をのべたりしていた。

すげー・・・

まさしく皇帝の住み処って感じ・・・

でも豪華つてよりも、趣味の良い実用的な感じがする。

「余が、エルディアス三十一世、ティーリス皇帝だ。」

・・・とかはさておき、そなたは異世界から来たそうだなー??

是非とも、そなたの居た世界の話を聞いてみたいものだ!

おっと・・・そういえばそなたの名はなんとゆうのだ?

「えつ、あ、大神 英司といいます?」

「なぜに疑問形なのだ・・・」

カイゼルのオッさんガ横から小声で突っ込んできた。

「いや、俺の居た国には皇帝とか王とかいなかつたし・・・
国のシンボルみたいな人はいたけど、別に権力持つてなかつたし。
正直どうしたもんかと・・・」

「お、おい・・・」

あ、声大きかつたかなー??

「ほう！？ 王も皇帝もいないとせ、それでせびりやつて國せ成り立つていのだー？」

「それは・・・えつと、民主主義といひてですね・・・・・・

などと、元居た世界のあれこれについて、根掘り葉掘りされた。

正直疲れきつてダルくなつてきたし、横手にある小さなドアから、誰かが覗いているのが見えた。

「ん？」

「どうした？」

「いえ、あそこのドアに不審者が・・・」

「なに?」

と、その不審者と皿があつた。

「ひやつ!?

・・・え? もしかして、不審者って私のことですか?」

「うん、不審者にしか・・・」

「あ、あー・・・すまん、その者は不審者ではなくてだな・・・
そのー・・・娘だ。

名はルセリナとゆう。」

「へ?・・・あー・・・それは失礼おば・・・」

なんか語尾が変になつている

「・・・えつと・・・なぜに皇女さまがそんなといふ?」

「偶然ですよ？」

「ウソだッ！！」

・・・いかん、つい突っ込んでしまった・・・

いかん！　フォローしなければ！

「しかし、いいセンスだ！」

・・・正直、ミスった感が否めない・・・

「そ、そんな！　・・・照れますね！」

あれ！？　いいの！？

「・・・余はルセリナと初対面でまともに会話できる奴を初めて見
たぞ・・・」

“どうやら、皇女さまに入ってしまった突っ込みはおどがめなしのよ

うだ。

・・・周りは白い眼で見ているが。

しかし、さつきから、なんか変な気配がする。

先程、兵士のおさん達に斬りかかった時のような・・・

でも俺が狙われてるわけでもなさそうだ。

わざとば違つ氣がする。

まさか暗殺者がいたりしてね？

・・・なんかそんな気がしてきた。

・・・これがフラグといつやつだらうつか。

気合いで暗殺者とかわからんものだらうか……

試しに、『力』を広げてみる。

(それを感じ取ったのか、ユニーが
「えつ、エイジ、突然なにを?・・・」

・・・とか言つているが、英司は氣付かなかつた。)

すると、その『力』でなぞるかのように、周りの物が感じ取れる。

皇帝や皇女、横にいる伯爵やユニー、後ろに控えている衛兵や、柱の陰に寄り添つてゐる人影、部屋の外に控えている衛兵や、廊下を歩いてゐるメイドさんまで。

うわ、本物初めて見た! 　・・・見えないけど。

・・・よし、何も無いな。

・・・ん？・・・柱の陰？・・・

「あのー・・・皇帝陛下？
つかぬ」とをお聞きしますが・・・」

「なんだ？」

「護衛の人は、どこにいます？」

「お主の後ろにいるではないか。」

「それで全部ですか？」

「そうだが・・・いつみたいなにを・・・」

「では、その柱の陰にいるのはこいつらしい？・・・」

そこまで言つた時、陰に隠れていた男は、

「うー・」

と、吐き捨てるごとに同時に、魔力を操り、マナを練り上げて魔術を放つとした。

やばー！？

俺は瞬時に、皇帝の前に飛び込んだ。

やけに身体が軽い。

「ウンジー。」

田の前で、魔術が音を立てて弾かれる。

「なにッ！？」

しかし、相当の手練れらしく、魔術が効かないと見ゆやすぐでも身を翻し、皇女さまを捕まえてナイフを突き付けた。

「わやあッ！」

「しまつたー？」

「全員動くなー　武器を捨てろー。」

「い、いや、はなしでー。」

「・・・へッ・・・熙、ゆうとおつこひ・・・」

や、ヤバい・・・予想、大的中！

・・・ どひじょひ・・・

・・・『力』で武器だけ弾けないかな?・・・

・・・行けそうだ!

よしー!

「セニッ!—」

「パキイイン!—!」

と、音がして、ナイフが弾け飛んだ。

次の瞬間、

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラあッ！…」

「ぐはあッ！？」

男は苦悶の叫びを上げて吹き飛んだ。

「・・・ふう・・・一度やつてみたかったんだよなー。
・・・つと！

大丈夫ですかー？」

「え、ええ・・・あ、ありがとうござります・・・。」

青ざめていた顔が、もう赤みがかっている。

意外と気丈な人だな。

「なんとまあ・・・

英司よ、礼を言ひや。

危つく余も娘も、命を落とすといひだつた。」

「い、いえ、別にそんな・・・

夢中でして・・・」

「ほ、本当にありがとう」やれこめあひー。」

皇女さまがお礼を言ひてられる。

「こえ、べつに・・・それほどもあるぜー。」

「はーいー。」

肯定されてしまつた。

「・・・なんか肯定されるとそれはそれで困る・・・」

「ふむ・・・ハイジよ」

「なんでしょ、うへ。」

「礼の方は後日、するとして・・・」

「いえ、いいですよそんな・・・」

「まあそういうな。

この場合、受け取らない方が失礼にあたるのだ。
・・・それはさておき、一つ頼みがある。」

「な、なんでしょ、うへ？」

「時たま、『』で遊びさせて貰へれまいか。」

「へ？」

「余も正直退屈……ゲフンゲフン……娘の話しつかをしてもうりえないと見てのだが。」

「は、まあ……そのへりこでしたひ。」

「せうかそうか。

で、そなたは学生だ、といつておつたな。」

「ちうですが……」

「つむ、なりばいりでも学生をやるがよー。」

な、なんだと！？

せっかく学校もないし、遊び回りうとか思つたの！？
なんとしても断らねば…

「いやしかし学費とか」

「勿論此方で庄やう。」

「こゝへ、やうではなぐ」

学校とかちょーめんぢやう。」

「なんだ、遠慮するな。
控えめなやつだな。」

「いえ、そりでもなく・・・」

「わーエイジも学校行くの?
いつしょだねー。」

！？ツ　　ゴーー。お前もかツ！？

「エイジ様も行かれるのですか？
いつしょですねつ！」

くツー？　周りは敵だらけかツ！？

・・・ふと、皇帝と曰があつた。

楽しそうに、笑っているが、曰がいつ言つていた。

・・・逃がさんぞ？・・・

・・・と。

「くツー・・・　謀つたな！？」

「クツクツク・・・　まさかそなたも断れまい！
ハーッハッハッハ！」

「してやられた・・・
わすがは皇帝と云ひ」とかツー！」

「フツ・・・　そなたが学生だったのがいけないのだよ」

「・・・お父様とエイジ様、楽しそうですね・・・」

「そうですねー」

・・・というわけで、俺の学園行きが決まってしまった・・・

第七話 謀つたな！？ 誰とは言わないけど、謀つたなッ！？（後書き）

皇帝は忙しいけど、退屈なのです。

そして、皇女さまフラグですね！

そのうち学園編になるかもしれません、それは主人公がもつとメカいじつたりチートアップ（チート能力がパワーアップ）してからです。

第八話 テイレイは男のロマンだっせー（前書き）

思いの外、早く投稿できました！

とゆづわけで、怒濤の三連投稿、最後の一話です。

・・・どれも短いですけどね。

第八話 テイレイは男のロマンだっせ！

英司は、ひとまず研究所近くの部屋に泊まる事になった。
とは言つても、皇城の中だ。

ちなみに反対側の部屋はユニーの部屋になつていて。

以前は、研究所の予備の部屋だったが、今ではユニー専用の研究室の
ようになつてゐるそうだ。

家具なども、ひとつおりそろつていて。

面識がある者が近くに居た方がいいだろう・・・といつたらしい。

最低限必要な物は、研究所の方で用意してくれるそうだ。

とりあえず特にやる事がなくなつた英司は、ユニーと共に、大きな演
習場のような場所に来ていた。

ゴニヒフィアに頼んで、魔術を教えてもらひつ事になつたのだ。

「それじゃ説明するよ?」

「チユートリアル編キター!..!..

「・・・よくわかんないけど楽しそうだね・・・
まあいいや。
まずはマナと魔力についてだね。」

「つむ、基本じゅな」

「IJの世界は、マナで満ちているんだ。

英司のいた世界には、マナや魔術が存在しなかつたって本当なの?」

「ああ、なかつたな。

物語の中とかならたくさんあつたけど、実際に見たことないし、き
いた事はあるけど大抵インチキだし。

それに、このマナっていう『力』も感じたことはないよ。

それに比べてこの世界は、なんだか『力』に溢れるような感じがする。」

「それは不思議なのじや・・・本来、生き物はマナが無こと生きていけないのじや・・・」

「まあそれはおことこで続か。」

「いむ。

『マナ』とは、世界に満ちており、どこにでもある。まあ、靈脈などと呼ばれる場所から湧いているともいわれているのじや。

この近くもあるのい。

そして、生き物も体内において、僅ながら作り出す」とも出来るよつじや。

そうは言つても本当に僅かじやがの。

そして魔力じや。

これは、マナを操作する力のことじやな。

これが強ければ強いほど、支配下におけるマナの量や効果範囲、魔術の効果や術式強度も強くなるのじや。」

「なるほど、魔力は強い方がよい、と」

「まあそんな感じじゃ。」

「それじゃ、魔術についてだね。

魔術、と言つてもいろいろあるけど、大きく分けて2つあるんだ。」

「魔法陣や魔術回路を利用した、『集積魔術』。

それと、基本的に詠唱のみで発動させる『詠唱魔術』じゃな。」

「なるへそ。」

「まず集積魔術だけど、エイジがわざやつた回復魔術。
あれ
が集積魔術ね。

まああれは結構特殊だけど。

今この国で一番盛んな『機構魔術』も集積魔術だね。

マナを送り込むことによつて動いたり、効果を出したりするんだ。

『魔導機械』っていうんだけどね。

ボクもそれが専門なんだ。

で、今からやるのが詠唱魔術。

単語を発してイメージを練り上げ、それに感應することで魔力によつてマナを操作して、簡単な超自然現象を起こす、最もポピュラーな魔術だよ。

火を出したり、風を吹かせたりするんだ。

極めれば無詠唱でも使えるらしいよ。？」

「それは楽しみだな！」

90

「唱える詞は、だいたい3つ以上の言葉で出来るんだ。

『起こしたい現象』、『それをどんなカタチにしたいか』、『何をしたいか』

の3つだね。

これを唱えることによって、明確に術式をイメージして行使することができる。

あとはテンションを上げて、自分のカツ『よさに酔つ』ことによつて魔力が強くなるらしいよ？

だから、同じような効果でも、色々な詞があるし、もつと長かったりもあるよ。」「

「自分に酔つって……
なんだかなー……」

「うん……

だから魔導士にはイタい人が多いつてゆつ尊もあるよ。」

「そういえばファイアって大魔導士だつたな！」

「な、なんじや その田はー?
み、見るな！
私はイタイ子などではないのじやー。」

「どうやら黒歴史のよつだな……
まあこーしゃ。」

「んじや、ちよつとやつてみせぬね……
『風よ、集え』」

ユニーがやつて呟くと、ふいにユニーの周りの砂礫が渦巻き、舞い出された掌の上に集まり始めた。

「こんな感じで起らししたい現象を描いてイメージするんだ。『集めて、敵を撃て』！」

掌に集まつた風の塊が飛んでいき、広場の真ん中に叩きつけられた。

砂ぼこりが止むと、地面の表面が吹き飛ばされて小さくへこんだ。

「まあこんな感じかな。」

「おおつー！
かっこいいなー！」

「本当は『風よ集めて敵を撃て』って繋げて言つんだけどね、意味が解ればけつぱつどうでもいいんだ。」

じゃ、やってみよう。

まず、周りのマナを把握するんだ。

魔力って言つても、要はイメージだからね。

なんかこう・・・力で風をうわあーって動かして渦巻かせて加速させながら掌に集めるイメージ」

「まんまやん・・・」

目を閉じて集中する。

すると、まるで空氣のように、自分の周りに『力』が溢れているのがわかる。

・・・なんだ、使いたい放題じゃないか・・・

『力』がある空間にある空氣を、その『力』を以て掌握する。

・・・まるで空氣分子の一つ一つが感じ取れるようだ・・・

「風よ集え」

把握した空気を加速させ、掌の上に集める。

加速は渦わずかに、そのまま掌の上で回転をせん。

「・・・・・ジ・・・ハイジー」

「はつーー?」

目を開けると、驚いてくるような口の顔があった。

なんだか掌が熱い。

「ねえ・・・ハイジ・・・それなー?」

言われて掌の上を見ると、ショーツオオオオツーーーと音をたてながら

ら・・・

・・・光る球体が浮いていた。

「なんで！？」

そんなバカな！？

ちゃんと風をイメージしたのに！？

「ボク知らないよ！？」

ついにはバチバチと放電を始めている。

「そうか！

これはプラズマだ！

圧縮された空気が、高圧、高熱になつてプラズマ化したんだ！

・・・バチバチいってんのは静電気かな?「

「なにそれ?」

「クツクツク・・・此れなるは原初の光・・・
万物を光と還す、根源の光よ!—」

「はいはい。・・・で?」

「・・・グスッ・・・ヒドイや。
・・・これに触ると、光になつて消滅するよ。
高熱の火に似てるけど、これだと灰も残らないよ。」

「す・・・スゴい・・・ね?」

「まあ材質とか大きさにもよるけど、理論上、これで壊せない物質
はなかつたよ。

少なくとも俺の世界では。

・・・たしかそうだった・・・ような気がする。」

「・・・曖昧だね・・・

「別に専門家じゃないもん。」

「適当じゃのう・・・

「とりあえず放つてみたりどうじや？」

「そつだ、少し面白い事を思い付いた・・・

「よし・・・『集いて敵を撃て』！」

・・・ヒュボツ！

・・・といふ音がして、50㍍ぐらい先の地面に穴を開けて潜り込んだ。

「よく飛ぶのう・・・
しかし思いの外、地味じやの。」

「穴開けたのはスゴいけどね。」

・・・フツ！ そんな事を言ってられるのも今の内だ！

クツクツク、見るがいい！

「爆発！！」

ドッ！「オオオオオオン！！」

・・・次の瞬間、地面が吹き飛んだ。

「 「 ． ． ． ． ． 」

「フツはツはツはツはツ！
見たかこの威力！」

「 「 ． ． うわあ ． ． ． 」」

． ． ．そこには、25m程のクレーターが出来上がりっていた。

第八話 テイレイは男のロマンだっせ！（後書き）

すいません別に知識もないのにプラズマとか書きました。

電気についてもよくわかんないのに書きました。

調べてみたけどよくわからなかつたんです。

誰か、詳しい人がいたら簡単に説明していただけないでしょうか！

なんかかっこいい使い方とかがあつたら採用するかもしれません。

第九話 N女の秘密と夢物語（前書き）

遅くなつてすいません。

作者が話を思い付かなかつたので遅れました。

では！

第九話 N女の秘密と夢物語

氣を取り直して、ヨーロッパと案内してもいいことになつた。

いやー・・・皇城つて広いなー！

そして、ヨーロッパの部屋も見せてもらひつた。

部屋の一画に、家具類、ベッドやクッショーンなどがまとめて設置してある。

そこだけ見れば、女の子らしいと言えなくもない。

・・・しかし、それ以外の場所は、怪しげな機械や実験器具、工具などで埋めつくされていた。

「や、やつぱり女の子らしくないよね・・・

なぜかユニーが落ち込んでいる。

しかし、何を隠そう・・・この俺」と、大神 英司は、機械とか工作とか大好きなのだッ！！

「何を言う！

俺は大好きだぞ！？」

「ええっ！？／＼／＼

風邪だらうか？
ユニーの顔が赤い。

「メカは良い！

とても良い部屋だな！」

「・・・あ、ああ・・・うん

・・・ソウダネ。

ソウダヨネ。

・・・はあ。

「

なんだか急にユニーが不機嫌になつた。

「ん？　どうした？」

「なんでもないよ。　・・・はあ・・・。
・・・まつたく、エイジって・・・」

「え？　なんか言つた？」

何か言つていたけど聞き取れなかつた。

「何でもないよ。

・・・それより、エイジには謝らなくちゃいけないことがあるんだ。

「

「え、何かやらかしたの？」

「や、やらかしてないよ、」

ただね、ボクとエイジの部屋こそそれ、ぞれ地下室があつたんだ。」

「あつた？」

「何故に過去形？」

「うん。

あつたんだけど……

ちゅうと前に、ひつそり壁を取り壊して部屋を繋げて使つてたんだ。

おこおこゴニャリもございません。

「あ、それは……ちゅうと秘密の開発をね？」

「あ、何をしてたの？」

「なにそれ！？」

めつを氣になるんですね！？

「何!? 何やつてんの! ? 見せて見せてー! ?」

「ううつ・・・
・・・わかつたよ・・・
見ても笑わないでね?
・・・あと、皆には秘密だよ?」

「了解だつぜ！」

そこは、かなり広い空間だつた。

「こんな空間があるとせ驚きじやのう……」

「地下室つてこんなに広いのかー?」

「うふ。…………まあ、これは結構拡張してんだね。」

部屋の中は暗くてよく見えない。

そして、ローが壁に設置されている何かに触れるとい、地下室の中を照明が照りし出す。

セイはあつたのは……

「なつ……なんじゅうじゅああああーー?」

……こいつかの、巨大な鎧のような機械の塊だった。

「う・・・これはもしかして！？」

「なあフィア！？
これって！？・・・」

「うむ・・・これは・・・ゴーレムか？」「そう。大昔の戦闘用ゴーレム。それも、搭乗タイプの。

・・・今では皆、『もっと戦闘に向いた効率的な形がある。人型なんてナンセンスだ。』とか言って、使おうとする人なんていないし、開発する人もいないんだけどね・・・でもね、ボクは『人型』であることも何か意味があるんだと思うんだ。」

ぽわぽわしたかんじのユニーが、いつになく饒舌だ。

そのことについて驚いていると、

「『』、『』めんね？
なんか変なこと言つて。」

「いや、ユニー。

てことは、Iの『ゴーレムを研究して、新しいゴーレムを開発しているのか?』

「う、うん。

なかなか進まないんだけどね・・・。

でも、何時の田か完成した人型ゴーレムに乗って、練り歩くのが夢なんだ!」

なんだか目がキラキラしてくる

「ゴニョ

と、急に顔が曇り、

「な、なに? やつぱり女の子じゃないよね?
よね? 『、じめんね?』

気持ち悪い

俺が言いたいのはそんな事ではない。

「『友』、と、呼ばせてもらっても良いかね?」

「・・・・・へ？」

ユニーの言葉に、俺は感動していた。

「俺の世界にも、科学によつて、人型の機械を造つうとする奴らがいた。

・・・でも、化学者達は口を揃えて、『あり得ない。非効率極まりない。実用的ではない。』の一点張りだ。

だが、俺は夢に見ていたんだ。

俺のいた世界に数多ある物語のよう、巨大人型兵器に乗つて練り歩くのを・・・

何時の日いか、そんな世界になる事を！

・・・まさかこんな所に同じような事を考えているやつがいるなんて思つてもみなかつたけどな。」

実は俺のメカ好きも、このあたりからきている。

「・・・・H、エイジ・・・！」

・・・ガシッ！

俺はユニーと手を取り合つた。

「是非とも俺に協力させてくれ！！」

「うひ、うんひ！　そんな事言つてくれたのはエイジが初めてだよー。

あ、ありがとうひー！

こいつはいじめようじへねつー！？」

「ああつー　よろしくなつー。」

・・・と黙つて、ユニーと見つめ合ひていた。

・・・なんか照れるなコレ。

ユニーは理解者が出来たのが嬉しいのか、顔が赤い。

「あ、あの……エイジ……その……手……//」

「おっとすまん。」

「……もう……エイジってばもしかして天然でやつてるのかな
? ……」

「なんか言つた?」

「なつ、なんにもつてないよー?」

・・・なんだる?・
まあいいや。

「・・・私、さつきから空氣じやのう・・・」

・・・なんか大精靈な短剣のフィアさんが、1人(?)さびしそうにしていた。

第九話 N女の秘密と夢物語（後書き）

はい、というわけで、作者の趣味が顔を覗かせましたね！

作中の主人公の夢は、作者の夢です。

何時の日か、人型メカに乗つて練り歩くのは私の夢なんです。
別に兵器である必要はありませんが、それなりにハイスペックでなくてはイヤです。

ではまた近いうちこ。

第十話 探偵なのか？それともエスパーなのか？（前書き）

PVが12000越えたよわーい！

さんくすみなさん！

では

第十話 探偵なのか？それともエスパーなのか？

地下室で友となつた俺達は、学校へ行く準備をすることにした。

実はその学校もここに近くなさうで、泊まりの支度はしなくてもいいらしい。

何でも魔術が必修課目なので、何かしら杖などの武器が必要なのだそう。

集積魔術と詠唱魔術の両方があるらしい。

なので、集積魔術の為の武器などがないと、困る事もあるそうな。

「なあフィア。」

「なんじや？」

「フィアは昔、大魔導士だつたんだろ?」

「その通りじゃー。」

「じゃあ、魔術のコツとか教えてくれよ。」

「ふむ・・・。やじやのう・・・。
魔術、ところモノはじやな、すなわち空間を支配する術なのじや。」

「へ?
空間?」

なんじやそら?

「うむ。
魔力によって空間を支配し、自分のいめーじ通りの現象を起しそ。

世界を切り取り、自らがその世界の『神』となるのじや。
極めれば、『出来ない事は無い』とまで言われておる。
あとはどれだけ自分の『いめーじ』を鮮明に投射できるかじやな。
まあ『いめーじ』が大事つて事じやな。
よつね氣合こじやー。」

「な、なるほど。」

イメージと『気合』いか！

「ヒカルで、集積魔術用の武器つてフィアでいいのか？」

「つむ。しかし、この短剣は戦闘には向かないのじや。

・・・アーヴィングの・・・あるじよ、武器を造つてみんか？」

「それは面白そうだ！

・・・でもそんな簡単に作れるのか？」

「私とあるじなら樂勝じや！

材料もヒカルあるじのう。

「材料つて・・・」「レ?」

部屋の中に転がっていた、古びた両手剣を指す。

「それじや。

では早速やってみるかのう？」

「おうー。

・・・でもどうやるんだ？

「うむ。 錬金魔術じや。

その内の彫金魔術とこうのを使う。つまり大きな設備が必要じやが、私とあるじなり無くともそれ以上上のモノができるよつ。」

「おおー。 あの錬金術か！
・・・で、どうやるんだ？」

「うむ。 ではまず、魔力でこの剣の空間を把握するのじや。 つまり、この剣の全てを理解するのじや。」

「つよ、了解。」

集中して、剣を見る。

剣の中にある『力』が理解できる。

鋸びや欠け、傷や凹みが分かる。

それより遙かに細かい、粒子の細かい・・・なんとかのだから
か・・・形の流れが解る。

「まう・・・自力でそこまでできるとは・・・
やるのうあるじよ。
ではこくぞっ！」

・・・と、ファイアが囁つと、剣が空中に浮かび上がった。

「おお・・・なんか無意味にスゲー・・・」

「んなこしたビードリって良いわ！
・・・やつしたらゆづくと加熱するのじや。
「こやんなこた言われても・・・
どりやんのへ！」

「『熱』をこめーじくることじや。」

熱ねえ・・・

まあやつてみよへ。

「ぬるシ！――」

・・・いきなり剣が白熱して融けはじめた。

「す、すとつぶじや！

大体今ぐらこの勢じをき一ふかのじや！
微調整はしきつけでやるのじや。」

「了解。」

とつあんず言われた通りにやつてある。

「つむ、それで良い。」

ところであるじよ。

・・・一つ試してみたい事があるのだが。」

「なんだ?」

「アダマンタイトを造つてみんか?」

「え? 伝説の金属! ?
あれつて作れるモノなの! ?
てか実在すんの! ?」

「いや、アダマンタイトの生成に成功した、という話は聞いたこと
がない。

アダマンタイトやオリハルコン、ミスリルと言つた魔導金属は、靈
脈付近で非常に稀に採取されるモノじや。

・・・それについて、私は一つの仮説を立てたのじや。

普通の金属が、金属結晶になる時に膨大なマナにさらされる事で魔
導金属となるのではないか、と。

私では力不足だったが、あるじの力ならば可能かもしれんぞ?」

「よし、やってみよう。」

「つむー。

では、この融けた鉄にマナを流し込むのじゃー。
おもこつきりやって構わんぞー！」

「おひめー。

・・・集え・・・集え・・・集え集え集え集え集え集え集え集
え集え集ええエツーー！」

刹那、付近のマナが消え失せ、英司の周りに集つた。

そして英司の手元から、小さな剣だった鉄に流れ込む。

「あ、あるじー！

やう過ぎじゃやー！

辺りのマナが消えておるー！

さすがにマズイのじやー！

おもこつきりとおもこづいても自分の内のマナだけで充分なのじゃー！」

「なんですかーーー？」

あわててマナを戻し、勘で調整してみる。

次の瞬間、鉄がまばゆい光を放つ。

「・・・せ、本当にうまくこくとは・・・
その状態を保ちながら、今のうちに自分のいのーじする武器の形に
作り込むのじや！」

「えー？」

「早くあるのじや！
その間、マナ操作は私がそこまでしておくれのじや！」

ひたすら放出される英司のマナを、フイアが微調整していく。

「いや、武器って言つても・・・
ええい！ シンプルに日本刀だつ！！」

白熱した鉄を、まるで粘土のように練り上げる。

「やっぱり魔術って便利だな」

まるで幾度も折り重ねて圧縮したような多重構造を、魔力によつて一瞬で造り出す。

この時英司は、つくりかけの刀の分子構造を直感的に全て把握していた。

・・・中心は粘りのある感じ、外側は硬い感じで・・・
・・・形を整えてつと・・・

「これでいい?」

「・・・びっくりじゃ・・・

よもや初めてでこの完成度とは・・・
・・・しかし初めて見る武器じゃな・・・

片刃の曲刀のようじゃが、こんな構造は初めて見るぞ・・・

クツクツク・・・

「ファーム、驚いているな?

「これが・・・これこそが!
和の国の技術にして芸術・・・

世界に誇る“漢”のロマンツ・・・『

日 本 刀 ツ だツ!

「!-

・・・決まった・・・

・・・完璧に決まってしまった・・・

「・・・フーン」

うわっ ひどっ!?

「なんかリアクションくれたっていいじゃない!?

「すゞいすゞい。 びっくりなのじやー。」

「わーい。」

・・・ぐすつ・・・

・・・ひどいや・・・

「わ、わかったからいじけるでない！　・・・まつたく・・・

「それまたおお、こいつかひどいすんなの？」

「はあ・・・まつたく」のあるじは・・・
うむ。　では私の宝玉を嵌め込むすべーすを造るのじや。
細かい所は私がやろひ。」

「了解。　・・・んじや」の呟つ。」

刀の鐔のあたりに穴を開け、強度を保つために補強用のカバーを作
つた。

「……うむ。 概ねこんなものじゃり。 改良したければ、また何時でもできるしのう。 ……では、ゆっくり冷却するのじや。」

「了解。」

英司は直感的に分子レベルでの操作が出来るので、いちいち焼き入れ等をする必要が無いのだ。

最後に、ファイアの宝玉を短剣から取り外し刀に嵌め込む。

「……完成じゃな。
……しかし、こんな良質なアダマンタイトの剣など、値にしたら国の大財政がひっくり返るべるぢやぞ……。」

「……そいつはスゲェ……
てかマズいんじゃなあーか……
コレが量産されたら、世界の相場とかが大変な感じにならないか?」

「うむ。 それに、戦力のせうじすも偏りそりじや。

・・・まあ いろんなもの、あるじにしか作れんじや らうから出せりゃ
だけ秘密にしておけばいいじやう。

先祖代々伝わる家宝とでも言えばよからう。

「なるほど。 んじゃ、これは極秘つて事で。」

「うむ。」

バタンッ！（ドアが開く音）

「うおーー？」

「ハイジー さつきマナが一氣になくなつたけど何やつたのー?・
・・・って、なにそれ?」

「・・・あ、あー・・・　これはだな、先祖代々から伝わる・・・
「つてこれアダマンタイトー!?」・・・家宝でな?」

「どうこう」と?

・・・召喚したわけじゃなさそうだし、この部屋にはそんなものなかつたし、もともとそんなもの持つてなかつたし・・・
もしかして造ったの!?

「・・・・・・

何故わかる!?

「造ったんだね?」

・・・早速バレた。

第十話 探偵なのか？それともエスパーなのか？（後書き）

とゆ一わけで『はじめてのぶきづくつ』編でした。

この小説の諸設定は、基本的に作者の思い付きですが、意図的にネタとしてリストしている場合と、今までに蓄積した知識から無意識に引用している場合があります。

ネタとして出す時には、わかる人にはわかるようにしてありますが、無意識の場合、さも自分で思い付いたかのように書いてあります。
・たぶん。

だつて無意識ですもん。

無意識のことなんてわかりませんもん。

ですので不快だつたらこいつそりメッセージください。
こいつそり直します。

・・・でも異世界召喚主人公最強って時点でかぶりまくりな気がしないでもない・・・
ではまた近いうちに

第十一話 刀ってかっこいいけど、正直振り回すの大変だよね（前書き）

短いです。

では。

第十一話 刀つてかつこいいけど、正直振り回すの大変だよね

さつそく造った刀、ファイアードエッジ（命名・英司）を使ってみる事にした。

英司は元の世界では一応、古武術をやっており、扱いは知っている。

現在英司たちは、再び演習場に来ていた。

「セイツー！」

ズバアッ！！

・・・地面が割れた。

「威力はそこそこか。」

プラズマほび派手じゃないな。

「・・・いや、はんぱない威力だよ！？」

「うむ、振つただけでこれとは・・・
次は集積魔術をやつてみようかのう。」

「了解。 マナを流し込めばいいのか？」

「うむ。 それを私が組んだ術式で刀身から発動するのじや。
どんな術式にするかはあらかじめ決めておいて、きーわーどで発動
するようにしておけるぞ。」

「便利だな！ どんなんがあるの？」

「詠唱魔術だと時間がかかるといふを、わんたつちで発動させられ
るぞ。」

とは言つても、本体が刀なので離れた相手には斬撃をとばすべから

しかでれんし、射撃系の魔術とは相性が悪いしのう。」

「……それ、アーマーじゃね？」

「使い手しだいじゃな。」

「んじゃ他にも武器造るか！

・・・でも全部持つて歩くのもなー・・・

「……こればっかりは他に武器を作つて私を嵌め込み直すしかないのう・・・」

・・・それじゃ時間がかかるな・・・

「なあフイア。」

「なんじや？..」

「作って置いた武器をまとめてどこかにしまっておいて、使う時だけ召喚して組み合わせて……いや、直接ファイアの周りに展開したらどうだろ？」

「かそんな術式組める？」

「なるほどー。

たしかにそれはここに備えじゃー。

問題ないぞ？

・・・そうじゃな、武器は異空間にでも収納しておけばよこのではないか？

普通は不可能じやが、あるじなら朝飯前じやな。」

「まじか！　・・・クックック・・・楽しくなつておたせえつー。」

「「・・・・・」」

「なんだおまえり、その尊敬するよつた姫が。」

「「別！」」

「まあいいや。 もうアバコのつか術は詰つてしまひやがへ。」

「・・・アハジヤな。」

・・・その後、いくつかの術式を登録し、一応の完成を見た。

せして再び武器開発に勤しむために部屋へ戻るのだった。

今回から『ユー』も武器開発に参加することになった。

「もし、どんな武器が良いかな?」

「やつぱり万能な杖とか、遠距離な『』とかじゃないかな？」

「やうじやな。 そのあたりが無難じやな。」

「でも『』扱いにくやうだな。
・・・やうだな・・・銃とかどつだらう？」

「ジユウウハなこ？」

「『』の世界には銃が無いのか！？」

「初耳じやな。 それはなんじや？」

「俺の世界の、最も普及してゐる武器だ。
兵隊はみんな持つてゐる。
剣や『』は、時代遅れになつてゐるんだ。」

「け、剣や弓が時代遅れ！？
魔術も無いのに！？」

「わ、私も驚いたぞ！？
それは一体どんな武器なのじゃー！？」

「もうだな・・・」の世界に大砲はあるのか？

「それはあるけど・・・
あんまり使われないよ？
戦術魔法とかがあるから。」

「あれを手で持てるサイズまで小さくするんだ。
弓よりも飛ぶし、簡単に当てやすい。
威力も高くて鎧とかじゃ防げない。
すごい速さで連射もできるし、弾こじめも簡単だ。」

「そんなバカな！？」

「ほ、本当なのかー！？」

「ああ。だから今の兵隊は鎧も着ない。」

「科学のみでそこまで行くとは……凄まじい世界じゃのう……」

「す、す、いね・・・」

「国を一発で吹き飛ばす兵器もあるしな。」

「・・・いくらなんでもそれはないよ・・・」

「いや、本当だ。

だからその兵器で戦争すると、世界が滅亡してしまってるので、条約でお互いにその兵器の使用を禁止してるんだ。」

「・・・想像を絶する物騒な兵器じゃな・・・」

「場合によっては何百年も毒を撒き散らすしな。」

「……とんでもない話を聞いてしまった気がするよ……」

「空を飛ぶ乗り物や、星まで行ける乗り物もあるぞ？」

「うそォー?」

「いや本当に。

庶民でも結構簡単に乗つて旅行ができる。
まあ星まで行けるやつはまだ一般人は乗れないし、せいぜい月へらいまでしか行けないけどね。

音よりも速く飛ぶことができるのもたくさんある。」

「……一度行ってみたいなあ……」

「……せうじゅのう……
しかしにわかには信じられない話……」

「まあ確かに便利だけどね・・・
でも魔術も無いしね。
物はあるけど、いろいろめんどくさい世界だよ。」

「やうこつモノかのう？」

「それにしてもすごい話を聞いたよ・・・
・・・で、結局何の話だっけ？」

「おおそうだった。
・・・で、銃を造つたらって話だつたな。
魔術で魔術の弾を撃つつてのはどうだろ？」

「うむ。 多分可能じや。

取り敢えずそれはどんな仕組みなのじや？」

「うーん・・・やうだな・・・
今の銃は薬莢つていう小さな筒に、円錐形の弾と火薬、信管が入つ
てるんだ。

その薬莢の後ろから信管を叩くと火薬が爆発して弾を飛ばすんだ。」

・・・と、図に描いて説明する。

「まあこれに複雑な機構が付いて、秒間15発とか撃てたりするんだけど・・・さすがにその仕組みまでは知らない。」

「なるほどのう・・・」

「ああ、あと、必ずしも火薬で飛ばすわけでもないんだ。
トリガーを引いたら攻撃が飛び出す手持ちサイズの武器はだいたいみんな銃つて呼ぶてる。」

「ふむ・・・正直私はよくわからないのじゃ・・・」

「じゃ基本的に俺が作るから必要な事・・・そうだな、杖や弓の事を教えてくれる?」

「つむ、了解じゃ。」

「ボクも手伝うよー。」

「ありがとう。 んじゃ2人ともようじくー。」

「うむ」「うん」

・・・そつしているうちこ、いつの間にか夜はふけていくのだった。

第十一話 刀つてかっこいいけど、正直振り回すの大変だよね（後書き）

すぐに次更新します。

感想とかもらえると嬉しいです。

第十一話 僕はかつて武器職人と呼ばれた男（前書き）

はい、とゆうわけで、一話連続投稿です。

今回、とても読みづらい仕様となつており、メカ設定とか苦手な人は・・・頑張つてください。
・・・ウソですダメだつたら飛ばしてください。

では。

第十一話 僕はかつて武器職人と呼ばれた男

結局、徹夜になってしまった。

「まさか徹夜になるとは・・・」

「・・・いや、一晩で出来た事の方が驚きだよ・・・」

「まつたくじや・・・」

ユニーたちの突っ込みにもキレが無い。

出来たのは、対物狙撃ライフルのような大型のものが一挺。オートマチック拳銃に、ブルバップ式のマガジンが着いたような、マシンピストルが一挺。

徹底的に凝った造りとなつた。

ユニーの部屋に転がっていた古い魔導クリスタルをアダマンタイトと

同じ要領で精製し直し最高品質に高めたモノと、これまたヨニーの部屋に転がっていた鉄から精製したアーダマンタイトを組み合わせ、三人の総力を結集して『マナ・コンデンサ』を開発した。

これにより、溜め込んだマナを一気に放出し、術式により収束、銃底の反発術式とアーダマンタイト製のバレルに刻まれた加速術式により射出する。

仕組みとしてはレールガンに似ている。

また、魔石や魔導クリスタルによる炸裂弾などの特殊弾頭、アーダマンタイト製の装弾筒付き徹甲弾などの実体弾を射出する事も可能である。

実体弾は、異空間に収納されており、マガジン内部に自動的に転送される。

その為リロードは必要無いが、弾種交換の為にマガジンを交換する必要がある。

術式により、弾頭に標的を追尾させる事も出来るが、弾速が速いためコントロールが難しく、狙撃した方が扱いやすい。また、ロックオンした標的を自動的に追尾する術式も思い付いたけど、今回は実装していない。

対物狙撃ライフルの方は、大口径で高威力の術式や実体弾で、高精度な精密射撃が可能になっている。

大型のコンテンサを搭載しており、チャージショットも可能だ。

マシンピストルは、比較的小口径で、高い操作性と連射速度を誇る。どちらかというとサブマシンガンに近いが、マガジンがグリップの

後ろにあり銃身が短い為、より小回りがよく仕様になっている。

「」の「挺のマシンピストルは一挺拳銃用でセットになつており、右手用のマシンピストルにファイアが、左手用のマシンピストルにはリンク用の魔導クリスタルが嵌め込まれている。

マシンピストルと対物狙撃ライフル、日本刀のグリップは共通しており、術式により変形する事で各武装とジョイントする。

つまり、手に持つたまま武装の変更が一瞬でできる。

・・・我ながら凄まじいモノを作つてしまつた。

「クッククック・・・まったく、自分の才能が恐ろしきせー。」

「・・・うん、こんな意味で恐ろしこよね・・・」

「まつたぐじやな・・・」

「・・・なんだおまえら。」

「「別」「」

・・・なんかこのやり取りお決まりになつてきた。

「じゃあボクはもう疲れたから休む・・・おやすみエイジ。」

「おひる。あつがとう。」

おやすみ。」

「おやすみー・・・」

「私も疲れたのう・・・」

「俺も・・・
そろそろ少し休もう・・・
・・・おやすみ。」

「いや、ねやすみなのがじや。」

いついて英団は異世界で初めての夜を徹夜で潰し、朝っぱらから泥のように眠って過ごすのだった。

第十一話 僕はかつて武器職人と呼ばれた男（後書き）

というわけで、作者の趣味が出てます。

・・・かつこいいなーとか思つてましたが、別にミリタリーに詳しいわけではないので、うろ覚えと思い付きで書いています。
なんかおかしいところとか設定とかがあつたら、こつそりメッセー
ジください。

ではまた近いうちに。

第十二話 聞いの基本は格闘だ（前書き）

さんざん遅くなつたあげく短いです。

すみません。

では

第十二話 聞いの基本は格闘だ

・・・俺は今、苦しんでいる。

何かが俺の上に重苦しくのし掛かり、押し潰そうとする。

お前は何者だ！

何故にこんな事をする！？

『名前など無い・・・お前と同じだ・・・』

機器人忍者の人ですか！？

『俺達は政府や誰かの道具じゃない・・・』

いや、それは潰されてる俺のセリフだ！

ザンジバーランドMGSI-

フォックスハウンドCIA！
フォックスハウンドCIA！・・・

「はつ！？」

そこは知らない天井だった。

あ、そういうえば異世界来てたんだった。

でも敢えてもう一度。

「知らない天井だ・・・」

・・・なんだかとても変な夢をみていた気がする・・・

なんだか本当に体が重い。

・・・まさかこれが金縛り！？

キヤーデンしましょもしかして心霊現象初体験！？

・・・あ、そういうえばファイアって死んでたっけ・・・

といつあえず苦しこむ腹のあたりを見る。

「うーー？」

な、なにゆえ！？

セヒロはなぜか皇女殿下の頭が乗つかっていた。

ベッドの横にひざまづくよつて寄りかかり、俺のお腹を枕にして寝ついている。

「こつたいなぜーー？」

「・・・・ううう・・・

・・・あ、おはよひ〜じゃこますハイジひやあああ・・・くふ〜」

「あ、おはよひ〜じゃこます〜」

・・・あぐびか挨拶かざつちかにしていただきたい・・・

・・・いやそういうではなくて！

「いや起きてください。」

「・・・すひょー・・・」

しかたがない。

「フンぬー！」

力を込めて腹筋を跳ねさせた。

「ふわつー？
なにじー」とつー？」

起きたか。

「おせよウジヤエコサク。」

皇女殿下が何故ここに立つ。」

「私の事はルセツナ、もしもセツナと呼んで下れ。」

「コナガタヨー。」

「これでここなの?」

「おせよウジヤエコサク!」

「今日から学校ですので朝のノル挨拶に来ましたー。」

よかつたらしこ。

「ああ、やつこくれば今日から学校だっけ・・・」

「はー。」

・・・ノンノン

「ハイジー？」 今日から学校だよーへ『ガチャ』つて皇女殿下！
？

「あ、ユーリさん。おはようござります。」

「おはようユーリ。」

「・・・あ、うん。おはようござります。
・・・何事？」

「俺もわからん。」

「私もです。」

「「えー？」」

その場にいる全員が理解していないようだ。

「ヒカルでお腹が減ったのだが。」

「あ、そうだね。ヒカルには食堂もあるからヒカルで食べよう。」

「あ、いいですね！
私も行きます！」

・・・いいのか皇女殿下。

食堂に行き、朝食を食べる。

三人で座っていると、周りの人�토ても居心地悪そうにしていたの

で、やはり皇女殿下がここに来るのは珍しいのだろう。

メニューはパンのようなものがメインのようだ。
それほど変わったものはなかつたが、微妙に違つ。

それなりにおいしかつた。

その後、一回リナとわかれ、部屋に戻つて準備をした。

・・・そしてついに、初登校の時がやつてきた。

第十二話 聞いの基本は格闘だ（後書き）

はい、これから学園編です。

ではまた近いうちこ

第十回話 こやせひひさわかといたまへ（漫書也）

遅くなつてすこません。

話が思い付かなかつたんです。

では

第十四話 いやもがりとつかとだかじね?

学校は歩いて十分もからないと感じた。

話によると、大学のよつなといふのよつだ。

制服とかは無いらしい。

ちなみに今の俺の服装は、ブレザーのよつな服だ。

ユ二たちが用意してくれたらしく。

かっこいいけど若手のやうだ。

フィアはライトセイバーみたいな柄だけの待機形態でポケットに入っている。

この世界に来た時のTシャツとジーンズは目立つのでしまつてある。

ユ二は「さあやさうなワンピース（？）のようなものにジャケット、ズボン、ブーツ、そして小さなビンなどを収納できるホルダー やポシェット付きのベルトをして、手には機械じみた長い杖を持っている。

魔法少女と鍊金術士を足して2で割ったようなかんじ。

なにこれかっこいい。

ちなみにリナの服装は意外に普通だ。

目立たないけどビリとなく上品なかんじ。

長袖な上にひざたけのスカートだった。

・・・俺も服ぐらり自分で金稼いで買おう・・・

校門をくぐると、登校してくる生徒でごったがえしている。

やはりこのメンバーは目立つのだろ。

大勢の生徒達が、遠くからじっと見ている。

2人はかなり目立つ容姿だからな。

あとは、黒髪黒目が珍しいのだろうか？

すると、取り巻きを連れた一人の生徒がやつてきた。
なんかいけすかないイケメン野郎だな。
そしてどことなく小物臭がする。

「これはこれはルセリナ皇女殿下、『機嫌麗しゅう。』
私、ザイール・ロスフェラともうします。
以後、お見知りおきを。」

と、言つたのを皮切りに、周囲の人間が、我先に挨拶を始めた。

・・・いやしかし・・・なつがいなー・・・

リナもイヤそうな顔をしている。

・・・しじうがない・・・

「なあリナ、そろそろ行かないとマズいんじゃね？」
と、声をかける。

「え、ええ！　そうですねっ！」

なここのめつを嬉しそうな顔。

挨拶攻めがそんなにイヤだつたんだろ？

気持ちはわからんでもない。

すると、周りが一斉に睨んできた。

「？」

なんだ？

「なんとゆう呼び方を・・・」

とか

「無礼な！」

とかいう声が聞こえてくる。

しうがないじやん本人にそう呼べって言わたんだから。

するとさつきのイケメン野郎が、

「きみ、今僕達が殿下にこゝ挨拶申し上げてゐるんだ！」

邪魔をしないでくれ！

・・・殿ト、このよつな下賤な者を身の回りに置くと、よからぬ誤解を招きますよ。」

・・・この野郎・・・絵に描いたようないけすかないキャラだな。

とつあえず無視だな。

「行けづばリナ・・・リナ？」

返事が無い。

ただのルセリナのようだ。

どうした？

・・・ズゴゴゴゴゴゴー。

・・・間違えた。
ルセリナではなく鬼のようだ。

なんかめっちゃ怖い。

「・・・謝りなさい。」

「は？ 今なんど？」

「や、そりだよ、ハイジに謝つてー。」

・・・」「お前もか・・・

ぶつかっけ超はずい。

軽く現実逃避するべからず。

「うるせーー、触るな魔眼持ちめ！ 気味が悪いー！」

・・・」のクソが・・・

「あーっ、足が滑ったー！」

と、声こひのクソの顔めがけて跳び蹴りを放つ。

メキヨツッ！

つトイイ音をさせて吹き飛ぶクソ。

「すまん、ワザとじやないぞ？」

「さ、貴様ツ！？」

おお、みじとな靴の跡だ。

「پークスクス。

すまんなクソ。

すまん、クソに失礼だつたな。

肥料として役に立つもんな。

うん、カスだな。

形骸である。

敢えて言おう！

カスであると！

すまんカス。」

「かッ！？・・・きッ！？・・・貴様ッ！？」

「なんだカス。」

「ふ、ふざけるなよ貴様！

この僕を侮辱した上に足蹴にするだと！？
僕を誰だと思っている！？」

・・・うわあ・・・

「セリフにもひねりが無いな。
所詮カスか。」

「 」シ・・・ 」シ、 」シ」

なんだコイツ鶏だつたのか?
いや鶏に失礼 r y

「 」け 」シ 」シ ？」

「殺してやる!」

「来てみろ・・・ハエども（ものつす）いバカにした声で）
たびたびすまん、ハ工に失礼だつたな。（眞面目な声で）」

「 しツ、死ねエエエツ！」

叫びつつ、腰にさげていたレイピアを抜いて跳びかかってきた。

「ほいっと。」

素早く手を捌き、呪をかけて投げ飛ばした。

カスはひっくり返つて背中から地面に落ちた。

「がッ！？ く、くそッ！」

よし、今のうちだ。

「行こうぜやー。」

ほつけた顔をしている2人の手を取り走る。

「ま、まてー。」

しつこいヤツだ。

てか待てと言われて待つやつがいるかつての。

「おばあーとひつあーん！」

・・・まてーいルパーーん！

とは言つてくれなかつた。

うむ、当たり前か。

第十四話 いやもひひさづかだなかいな？（後書き）

また少し時間がかかるかも・・・

ではまた。

第十五話 そんな装備で大丈夫か？（前書き）

す　い　ま　せ　ん　で　し　た　－　！
！（土下座AA略）

まじすいません。

色々な事件が連続で起こそり、かつ話が思いつかなかつたんです！（
本当）

・・・すこませんゴメンなさいお気に入りから削除は止めたげてー
！！

とこづわけで久々の更新です。

・・・今まで読んでくださつた方、ありがとうございますゴメンなさいー！

まだ連載始めてからそんなに長くないので、話を忘れてしました方
は最初から読んでくださいよこかど。（作者も忘れてました。）

そして今回初めて読んでくださる方もありがとうー！

不定期ですが、よかつたらお気に入り登録したあげくポイント入れ

たすえ感想くだされると嬉しいです！

では

第十五話 そんな装備で大丈夫か？

カスを振り切った英司達は教室へと向かつ。

「ハイジさん、 もうさせじうしたんですね？」
「いくらなんでもやり過ぎですよ～。」

しかし英司は不満のようだ。

「・・・ついカッとなつてやつた。
今は反省している。
でも、後悔はしていない。」

「・・・なんですかそのどこかで聞いたようなフレーズは？・・・」

「セリだよハイジ、 いくらなんでもやり過ぎだよ～。」

「・・・だつて・・・ユニはなにも悪くないのに『そもそもわぬ』とか『触るな』とか『ひんだもん・・・』

「えつー・?」

英司はユニーが貶されたのが気に入らなかつたようだ。

「えへへ、ありがと、エイジ」

「むう・・・」

ユニーはなにやら一やけでいる。

逆にリナは不満そうだった。

そんなことを話しながら、英司達は学校へ向かつて行つた。

• • • •

あれから一週間がたつた。

英司もやっと学園に慣れてきた。

授業は、自分の希望する講座を自由に選ぶことができるので、席も自由だ。

年齢制限は十一歳以上で、少ないが社会人も来る。

魔術や武術の講座だけでなくありとあらゆる科目があり、そのなかから自分に必要なものを選ぶのだ。

イメージとしては大学に近い。

英司は魔術、武術、魔導機械についてを基本に学ぶこととした。今は学校の教室と技術室、城の地下室を行き来して魔導機械兵器の開発に勤しんでいる。

今まで、魔導機械を持ちサイズに搭載した武器はほとんどなかつたそうだ。

明日からは魔術戦闘や武術などの実技系の授業が始まる。

英司は、この一週間で改良を重ねた武器のチェックに余念がなかつた。

『主よ、そんなモノなくともお主なら楽勝じゃ。ついでに……とこつか私なんぞがいなくともじゅうぶんじや。』

「ファイア、その油断が命取りだ。

以前、拾ったスクーター2台をバラして作ったハイマニユーバスーツでいきなり60キロ出したら左足だけエンジントラブル起こしてな。

あの時はホント、どうしようかと思つたよ。』

『……サッパリわからん……』

「それに、ファイアがいてくれると心強い。』

『そ、そつか。』

「うん。
まあさすがに疲れた。
もう寝るよ。

『いふ。ぬまなせ』

翌日

今日はついに魔術戦闘の授業の実技が始まる。

英司達は今、学園の演習場に来ていた。

「おうエイジ、ついに実技だな！」

話しかけてきたのはこの一週間で知り合いになった、イゴール・ワ
イズナー。

「ふつ・・・見せてもらおうか、イゴールの拳の性能とやらを…」

「いや俺の武器は剣だから」

「さいですか。」

などと話していると、一人の女子生徒が話し掛けてきた。

「少年、君があのエイジ君か？」

・・・なにこの人カッコいい。

てか“あの”ってなんやねん?

「はあ、そうですが?」

「私はアリシア。

アリシア ヴィーステインだ。

よろしく。」

「えっと、大神 英司です。

こちらこちらよろしく。」

「つむ。君とは一度、手合わせして見たかった。
ではまた後ほど。」

・・・と言つと、わつ・・・と居なくなつてしまつた。

「なんだつたんだろ?」

「お、おー、今のは魔導騎士団の副団長じゃねーか!」

お前いつたいなにやつたんだよー?」

なるほど、あれだけ騒ぎになつたのだから騎士団の偉い人なら知つてもおかしくない。

「いや、まあ色々と……」

事情を知つて『ユーニトルセリナ』が横で苦笑いしている。

「てかなんでそんな人がここにいるのさ?」

「色々つてお前……

そりゃあの人まだ18だし、この学園はあらゆる分野のトップが集まるからな、そうゆう人も多いんだ。」

「……お前くわしいな。」

「そりゃ有名だからな。

『魔導騎士団の戦女神』とまで呼ばれているんだぞ。ファンも多い。」

「……ふーん……」

・・・なんとか厨一ネーム。

「アハこやお前、この授業は初めてだつけ?」

「 むう。」

「じゃあどつあえず実力見らるる」と云なるな。
気合を入れてけよ?」

「頑張つてねエイジ。」

「頑張つてねエイジ。」

ふ、こままで言われては心えねばなるまい!

「大丈夫だ。問題無い。」

「よーしお前ら、授業始めるぞー。」

前に出てきた教師が、氣だるげな声をあげる。

おお、始まつたな！

ついに俺が改良に改良を重ねた相棒が火を吹くぜ！

「とりあえず模擬戦闘するぞー。」

・・・っと今日は初めてのやつが居るんだったな？

エイジ オオガミはいるか？」

「呼んだひじの番号をひだ。

「呼んだかね？」

「・・・ああ。

呼んだぞ。

・・・まあいい。

どんな魔術が使える？」

「だいたい使える。」

「それじゃわからん。

・・・なんか一番強いのをあの標的に撃つてみる。」

「触媒は？」

「使ってもいいぞ。」

ちなみに、触媒とは詠唱魔法の時に使う補助具となる、杖や武器などのアイテムのことだ。

そのアイテムにそつた使い方になるため使用方法が制限されるが、その分マナの変換効率や操作性が上がる。

モノによっては誰でも無詠唱で使えるものもあるとか。

いやしかし・・・本気でやると校庭が吹き飛びかねんのですが。

・・・さすがにマズいかなー・・・

・・・まあ適当にやってみるか。

吹き飛ばない程度に。

「んじゃ行きます！」

フィア、【ライティア】。」

『了解じゃ。ハンドィフォーム！』

今は右手の腕輪になつているフィアが応える。

腕輪が形を変え、黒いグローブが右手を包む。

そして手のひらこまといつの間にかマシンピストルが握られていた。

「なつ！？」

なんだそれは！？」

なにやら周りが騒がしい。

なんだか予想以上のリアクションだ。

「秘密です。」

「どうで手に入れたんだ？」

「自分で造りました。」

嘘は言つてない。

召喚された時に召喚用魔方陣からくすねたとか言えないし。

「一体どんな仕組みなんだ？・・・」

「秘密です。」

まあ異空間から出しただけなんだが。

手の内は隠しておくに限る。

「んじゃ、気を取り直して・・・
行きます！」

ファイア、【プラズマバレット】！

右手用の魔導機械拳銃、【ライティア】を片手で構える。

『すたんぱい れでいじやー!』

うむ、ちゃんと教えた通りに覚えているな！

よし、派手目に詠唱ありでいくか。

「ギシュツ」

銃身の側面が小さく展開し、エアインテークが口を開ける。

作動も問題無しだ。

テンション上がつてキターフ！！

「風よ、炎よ、雷いかずちよ！ 集え、集え、集いて狂い、敵を撃て！
其は荒振る光の弾丸！ 【プラズマ バレット】！」

余談だが実はこれの上位魔術に、万物を穿つ光の弾丸【ライトニング
グ バレット】がある。

出力が高過ぎて、プラズマビームが迸る恐るべき戦術級魔
術だ。

これだと、校庭どころか文字通り射線上の万物を殲滅しかねない。

「ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

・・・・・やつちまつた！

・・・つい現実逃避してしまった。

「ジャキユツ・・・バシュウウウ・・・」

スライドが作動、バレルがせりだして、冷却機構が作動し、マズルのあたりから十字に蒸気が噴き出す。

さすがに射線上をどこまでも・・・とはならなかつたけど・・・標的は完全に消滅し、その後ろの壁の役割を果たしていた丘を吹き飛ばし学園の裏山を削っていた。

・・・直前にテンション上げたのがマズかつたかな・・・

これがもしアンチマテリアルライフル型の【テストラクトランサー】とかで、上位魔術使ってたらと思つと・・・

大陸がすっぽりと・・・

・・・いやいやまさかね？

「うわああああつーっ」

「わわああああつーー？」

「ば、ばかなあつーー？」

ええい、皆の者、うるたえるでない！

「ゴメン、ミスった。

・・・テへ」

「……たしかに一番強いのをやれと言つたが……限度があるだろ!?」

・ すいません実はまだ全力じゃないんです。

「・・・正直すまんかつた。」

「・・・ああ。とりあえずその魔術は使用禁止だ。」

「了解です。

俺もこれを授業で使う度胸無いです。

・・・ やへ・・・ エツと、どいつせしよ、ウヘ。

「うむ。誰かコイツと模擬戦闘するやつはいない・・・か?・・・
「私がやろう。」いないよな・・・ってなにイツ!?

あ、さつきの人だ。

「えっと、アリシアさん、だっけ？」

「うむ。是非とも手合させ願いたい。」

あー・・・先生が困った顔してる・・・

「・・・お互いに殺傷力の高い攻撃は禁止だ。
あと広範囲を殲滅するようなのもなしだ。
いいな!?」

え？ いいの！？

授業止めないの！？

死ななきやいいの！？

凄い授業だな・・・

まあいい！

「そんじゅアリシアさん、よろしくお願ひします。」

「うむ、これがいいな。」

「ルールは説明した通りだ、いいな!?

・・・では、始め!!」

第十五話 そんな装備で大丈夫か？（後書き）

ではまた近いうちに

・・・とかいつて前回めっちゃ間違いたんだしたねすいません・・・

第十六話 空が私に力を与えてくれるのだー（前書き）

とこ、うわけで前回よりは早めに投稿出来たぜー！

・・・すいませんそれでも遅いつすねすいません。

ではー！

第十六話 空が私に力を与えてくれるのだ！

「ルールは説明した通りだ！・・・いいな？
・・・では・・・始め！！」

とりあえず挨拶だ！

「では、大神 英司、参る！」

「アリシア ヴィーステイン、参る！」

アリシアさんが、少し離れたところから叫び返してくれる。
律儀な人だな。

アリシアは、鮮やかなベージュに輝く髪を頭の方で一つにくく
つたポニーテールにしている。

ボーカルなアンドロイドのツインテ、もしくはダンスに定評のある
ボヤキなアンドロイドみたいなとても長くてたっぷりとしたポニー
テールだ。

胸当てと籠手、ブーツを履いて、左手に大楯、右手に大剣を持ち、左腰にはサーべル、後ろに短剣をさしている。

大剣の柄頭は平べつたいたカウンター・ウェイトのようになつており、小脇に抱えているので、まるで突撃槍のようだ。

どちらにせよ細身のアリシアには似合わない重装備だが、アリシアはそれをまるで片手剣と円楯のように扱える。

大きな魔力による肉体強化と補助があつて初めてなせる技だ。

一方英司は、武器は拳銃、丈夫そうな裾の長い黒いジャケット、裾に切れ込みが入った黒いズボン、その切れ込みの中から黒いブーツが少し顔を覗かせている・・・という、軽装だ。ていうかおまえ葬式かつ！・・・って言いたくなるような黒装束だが、黒髪黒目にとってもマッチしていた。

さて、ついに実戦だ！
まずは試しだな・・・

「【レフティア】！」

『トウーハンドフォーム セットとあつぱじやー！』

ファイアが応えると左手にもグローブが展開され、掌には右手の【ライティア】と対になる魔導機械拳銃、【レフティア】が握られる。

「【スタン バレット】！」

ファイアに向かつて術式を指定する。

『せつとあっぷ！』

フイアが応え、両手に握った銃のグリップの根元に埋め込まれた制御用魔導クリスタルと同期して術式を起動する。

空気の塊に電気を纏わせて打ち出す否致死性の魔術だ。

身体が痺れしばらく動けない程度の電圧と、思い切り殴られる程度の衝撃で敵を無力化する。

触媒となる銃弾を必要としない、すなわちマナを流してトリガーを引きさえすれば発動するお手軽な術式だ。

・・・とは言つても、この世界に電気系の魔術を扱える者などほとんどいないのだが。

まずはセミオートだ！

左右のトリガーを交互に引いて連続で打ち出す。

「バシュン！バシュン！バシュン！バシュン！

圧搾空気が破裂するくぐもつた音を響かせ、電気を纏つた空気の銃弾がアリシアに襲い掛かる。

「ツー？・・・ 我を運ぶ風の加護！」

対するアリシアは、風を身に纏い高速移動する強化魔術を使った。見事な短縮詠唱だ。

見た目では英司の攻撃の効果が解らないので、防御よりも回避をとつたのだ。

肉体強化の魔術と併用した回避制動は見事な物だった。

魔術詠唱をこなしながら、肉体強化のみで一発を右ステップで回避、次の瞬間発動した魔術により急激に逆方向へスライドし三、四発目をやりす”としたのだ。

「詠唱無しで連射が可能だとは・・・

そんな魔術は初めて見たぞ！？」

アリシアは驚愕していた。

大抵の攻撃系射出タイプの魔術は、一行から数行の詠唱もしくは暗唱の後に一発、というのが普通だ。
人間が扱える魔力、一度に放出できるマナの総量、制御できる総量、マナの変換効率を考えるとそのくらいが一番効率がいいのだ。
最初に術式名を宣言したら、後は撃ち放題なんて魔術は見たことも聞いたこともなかつた。「いやなるほど、身に纏うつてのもあるのか。

・・・カツコいいな・・・

「かツ！？

・・・そ、そうか？」

「ああ。参考にさせてもらひやせー！」

そんな会話を交わしながらも、アリシアはジグザグな軌道を描いて急速に距離を詰めて行く。

英司は自然体で構えながら狙いをつける。

「ヤ！」だッ！

「バシュン！ バシュン！」

これ以上ないタイミングで放たれたかに思えた。

・・・しかしアリシアは、直前で思い切り地面を踏み抜いた。

「我を囲え大地の守護！」

「ゴガツ！－！」

轟音を立てて足下が陥没し、その周囲から岩盤が飛び出すように立ち上がる。

放たれた銃弾は岩盤を浅く削ると霧散してしまった。

アリシアの姿は、つきだした岩盤と砂ぼこりで完全に覆い隠されてしまった。

「チイツ！ 何処に行つた！？」

バトルな空氣のせいでテンションがおかしい。

「・・・」のまま行けば死亡「フラグだな。
しかし…」の状況を打破してみせてこそ漢モードとこいモノ！」

先ほど見たアリシアの風魔術を参考に、アレンジを加えてイメージをまとめる。

・・・風よ、炎よ、雷いかずちよ！　集え、集え、集い狂いて我に従え！
其は荒振る光の翼！・・・

「プラズマ ウィング！」

英司の背中から、「うーうー」と噴射音を響かせて光の翼が噴き出すよう現れる。

足の周りにも凄まじいエネルギーが渦巻いており、時折翼と同じよう間にプラズマを散らす。

光の翼発動の余波で砂ぼこりを吹き散らし、空中に舞い上がる。

「空はいいぞ・・・空はいい・・・」

まさか生身の体で空を飛べる日が来よつとは思わなかつた・・・

アリシアは石盤の陰に身を隠しながら、相変わらず驚愕していた。

光の翼・・・

またもや見たことのない魔術だ。

まったく、驚かせてくれる。

【風の加護】だと、一時的に身体を跳ばしたり動きを補助したりするものが精一杯だというのに・・・
エイジ オオガミ・・・か。

不思議な男だ。

・・・それについてなんという光景だろうか。

黒衣に漆黒の髪と目、そして光の翼・・・
まるで天使か悪魔のようだ。

いや、墮天使か魔王が妥当かもしれん。

・・・はつ・?

いかんいかん！

見とれている場合ではなかつた！

例え彼が天使であつて悪魔であつて、強い敵なればそれを糧に
して前に進まねばならんのだからな！

アリシアは身を隠したまま、静かに詠唱を始めた。

「砂子よ、風よ、集え、怒れ、逆巻け、穿て、其は突き立つ大地の大槍！」

アリシアの周りの砂が盛り上がり、それを風が巻き上げる。
その過程で砂はいくつもの塊となり、形を変えて石の杭となる。

そしてアリシアの周りに並んだ無数の杭が、一斉に飛び出していく。

エイジは5mほどの高さから地殻変動を起こした演習場を眺めていた。

その時唐突に、壁のようにそびえ立っていた岩盤を突き破り、無数

の石杭が襲い掛かってきた。

エイジは、咄嗟に光の翼を吹かして回避する。

プラズマが煌めいて、まるで羽ばたいているように見えた。

そして次の瞬間、エイジの死角にあつた壁を突き破り、アリシアが襲い掛かる。

大楯を構え、大剣を小脇に抱えての突撃。

エイジは一瞬で体制を建て直し、左手の拳銃を投げつける。

それを大楯で弾き、アリシアが猛然と距離を詰める。

エイジは瞬時に右手の拳銃を解除、グリップを変形させると、刀の刃を召喚、グリップの中空部分にダイレクトに現れる。

大剣の先端を捌き、受け流す。

それでもアリシアは止まらない。

そのまま突っ込むと、大楯によるタックルを繰り出す。

エイジはそれに掌底を合わせて威力を殺すと、光の翼を吹かしてそのまま横に身体を逸らす。

アリシアはそのまま上空に飛び上がると、風魔術で身体をひねり方向転換、加速しながら大剣を大上段に振りかぶり急襲する。

エイジも空中で停止すると、いつの間にか左手に召喚した鞘に刀を

納め、居合い抜きの構えで正面から迎え撃つ。

振り下ろされる大剣。

それをアダマンタイト製の刀で以て切り裂く。

大剣が半ばほどで切り飛ばされる。

返す刀でアリシアを打とうとするが、アリシアは咄嗟に大剣を手放すと、スピードに乗る前の手元を大楯で押さえつけて止める。

その大楯を、プラズマを纏つた拳で殴り飛ばそうとするが、バチン！ という音と共に重さが消える。

アリシアの大楯は、ワンタッチで外せるようになっていた。
そしてその内側に小さな楯が付いていたのだ。

大楯を囮にして死角からアリシアが腰のサーベルを抜いて襲い掛かる。

負けじとエイジが迎え撃つ。

「「殺つた！！」」

第十六話 空が私に力を与えてくれるのだ!（後書き）

「プラズマ ウィング」はセーフでしょうか?・・・

別に孔雀の羽根みたいな形してるわけじゃないし単純な名前なので
セーフですよね!?

ではまた近いうち

第十七話 今更ながら何故に（前書き）

今まで読んでもくれた畠でも、お元気ですか？

私は一応生きてます。

私の居たところは、特に被害もありませんでした。

・・・では、なぜ今まで更新しなかつたか、とこうと、いつものように話が思い付かなかつたからです。

す　い　ま　せ　ん　で　し　た　！　！

これからも見捨てないでいただけたら幸いです。

前回までのお話を覚えてない方も多くと思つので、最初から読んで・

・・・ところは前回やつてしまつたので、あらすじをかきませう。

英司は、騎士団の副団長、アリシアと邂逅する。

教師「それでは、ガソダムファイトオッ！　レディイイイツ　ゴ
オオオオ！！」

アリシア「天に竹林！　地に少林寺！」

眼にもの見せろオ！ 最終秘弾！！

真·流星蝴蝶劍

英司「俺のこの手が真っ赤に燃えるウ！」

アリシア「勝利を掴めと輝き叫ぶウ！」

英司「爆熱！ ゴオオオオツド フインガアアアアアアアアアアアア！」

英司・アリシア

・・・八割がたウソです。

やつてみたかつたので。

ちなみに、このあとの本編に繋がるネタが二つそり仕込んであります。

では

第十七話 今更ながら何故に

「そこまでえツー！」

演習場に教師の声が響き渡った。

「 「 ． ． ． ． ． 」

誰もが無言だった。

英司の放つた居合いはサーべルを斬り飛ばしてアリシアの首筋に突き付けられていた。

しかし、勝利したわけではない。

英司の首筋には、アリシアのボニー・テール・・・その中に隠された刃が突き付けられていた。

「IJの試合、引き分け!」

再び教師の声が木靈する。

「　「　「　おおおおおーー!」　「　「

生徒達からは歓声が上がった。

「俺の負けだ。最後のやつは読みきれなかつた。」

「いや、私の負けだ。最初から相討ち狙いなど、負けたようなものだ。」

「いや、目的を果たしたアリシアさん、いや、アリシア姉さんの勝ちだ!」

「ね、ねえさつ!?

い、いやだから私は本来負けだったのだ!」

「完全に不意を突かれた俺の負けだよ姉さん!」

「あ、それがからなんなのだ！？　その“姉さん”どこへせー？」

「え？　“お姉ちゃん”の方が良かった？」

「お姉ちやー！」

「わあ、びっくりー。」

英司がたたみかける。

「・・・お、“お姉ちゃん”でー（キコシ）」

「・・・なん・・・だと？」

ま、まさかそつちを取るとは・・・
・・・しかたがない・・・

「お、お姉ちやー・・・」

アリシアがどこか期待のこもった潤んだ瞳で見つめていたことのよくな気がする。

「・・・すいませんさすがの俺も恥ずかしいので、間を取って“姉

れん”で。「

「…………」

・・・なんかアリシアが残念そうな顔をしていたような気がしたが、恐らく氣のせいだろう。

「じゃ、引き分けっこ」と。

「ああ、そうだな。」

その後、ようやく和解（？）した英司とアリシアだった。

「それにしても驚いた。

力で押していくのかと思つたら変幻自在なんだから。」

「それはいつものセリフだ。

空は飛ぶわ連射するわで見たことも聞いたこともない魔術の連續じやないか。オマケになんだその不思議な剣は。

私の大剣とサーベルをいつもたやすく……
それなりに高級品なのだと?
少し見せてくれないか?」

どうじよづ・・・

さすがにアダマンタイト製の刀をあんまり見せるわけにもいかんし・
・

「その漆黒の光沢、アダマンタイト製とみた!—!」

バレていらつしゃる!?

しかたがない・・・

「できれば秘密にして欲しい。
・・・少しだけだよ?」

「ほう・・・これは!?

国宝級・・・

へたをすればそれ以上だぞ!?

「へつへーん、いーだろー?」

「いーなあ・・・すゞいなあー。」

なんか目がキラキラしている。

自分の作った物をこれだけ素直にほめられたと結構嬉しい。

「お詫びと言つてはなんだけど、大剣とサーべルを修理、改造してあげよひー。」

「・・・そんな事出来るのか?」

「フフッ、皇帝陛下もびっくりの超兵器になるぜー?。」

「フフッ、では楽しみにしてこみや。」

「ああ、重さのバランスはこれと同じくらいがいい?」

「うむ。」

「よし、了解だぜ姉さんー。」

「ああ、頼んだ・・・!?

待て、そういうえば何で私が“姉さん”と呼ばねばならんのだー?」

「ところでその髪の毛どうやって動かしてるの？」

「」、「これか？」

髪の毛は魔導効率が良いからな、簡単に出来るんだ？」

「へえ？ 知らなかつた。

姉さんす」「」、「なー。」

「そ、そつか？」

・・・あれで『まかせるなんて・・・
姉さん意外と単純だな・・・

「そういうえばさあ、なんでもみんな戦い方や武器の使い方なんて学んだりしてんの？
戦争でもすんの？」

「」「」「」「は？」「」「」

話を聞いていたユニー、フィア、ルセリナとアリシアが固まつた。

「え？ なにその反応。」

「エイジ、もしかして今まで何も知らないで生活してたのー?」

「だつてまだ異世界から来て一週間だぞ！？」

「ていうか武器作つたり魔法の練習したりした時に、なんの為に使うのか疑問に思わなかつたの！？」

「授業でも言つてましたよ?」

「授業は多分寝てた。

それにあの時は、『異世界チートだぜヒヤツハーハー!!』…………とか思つてテンション上がつてたんだ。」

「・・・正真、すまんかつた。」

「はあ、まあいいよ。

「ねしおじいじ」こと、ハイジ

「……は呆れ氣味だ。

「そうですね。エイジさんつて切れ者っぽいけど、時々抜けでますしね！」

ルセリナは無邪気に心を抉る。

「ふふっ、そそっかしいのだな。」

アリシアは微笑ましそうに見ている。

「あるじはアホの子だつたのじゃな。」

フイアにいたつてはアホ扱いだ。

英司は悲しみのあまり大げさに泣き真似をかました。

「……ヒドいやみんなして……グスツ」

それを見たアリシアがあわてて慰めに行つた。

「！？　な、泣くなエイジ殿。
ほ、ほーら、よーしよし。」

アリシアのやせしさに全英司が泣いた。

「ウワアアアーン、おねえちやああん！」

「ぐはッ！？」

なにやらアリシアが鼻を抑えて悶えていた。

「それで？」

結局なんでみんな戦う訓練してるの？」

「それはじやな・・・」

フィアが語りだした。

「遠い昔、人類は大いに栄え、この地上を支配したのじや。」

「そんな壮大な話から始まるの！？」

「いいから聞くのじや。」

そして人類は栄華を競い、互いに争つた。

あらゆる兵器を開発し、互いに滅ぼし合つたのじゃ。

そして人類は、生物を兵器にする事を始めたのじゃ。恐ろしい事に、人間も含まれていたそうじや。

その生物兵器の成れの果てが、今では『魔獸』と呼ばれているのじや。

まあそれはさておき、争いは続き、ついには文明が滅んだ。

「驚愕の展開！？」

「ま、まてー

魔獸が生物兵器だという話は私も初耳だぞ！？

・・・た、確かに戦う為に生み出されたとは聞いていたが・・・」

「ボクも初めて聞いたよー！」

「私は聞いた事があつたような気がしないでもないような？」

「うむ。

おそらく時の流れと共に情報が風化したのじゃね？
話を続けるぞ？

そしてその後、生き残った生物兵器は繁殖を続け、世界は生物兵器と強力な野生動物がはびこる弱肉強食の荒野となつた。」

「マジか！？」

「うむ。
そして生き残った僅かな人類は、からうじて残った軍事施設やシールターの周りに城壁を築き、小さな国を作り、細々と繁荣してきたのじゃ。」

「・・・なんといつ歴史アリアマ・・・・

「うむ。

今でも城壁の周りには魔の森が広がり、時々魔獣が、街を襲いに現れるのじゃ。」

「・・・びっくりだぜ・・・・

「うむ。

今では魔獣も貴重な資源でもあるので、街の外に狩に出ることもあるのじゃ。

「

「うむ。

「それなんてハンター？」

しかし魔獸は一体でもとても強大じや。

そして本来、制御装置の役割を果たすはずの『女王』なども野生化し、制御は不可能じや。

そして群れを作る。

今まででは運良く小さな群れしか襲つて来なかつたが、万が一女王を含むような大群に襲われることがあれば、国が壊滅する可能性が高い。それを防ぐため、また資源を手に入れるため、そして生きるために人々は戦う術を学ぶのじや。

「

「・・・なるほど・・・ファンタジーかと思つたらSFだったのか・・・」

「今の聞いて感想はそれなのかー?」

「ふつ、ファイアよ、たとえ世界がどうなるにとも、俺のする事は変わらない。

ただ思うがままに生きるのみだ!」

人生楽しく過ごした者勝ちだぞー!？」

「あるじは思うがまますると思つてゐるのじや。」

その時、けたたましく鐘を打ち鳴らす音が街中に響き渡つた。

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

「 今の鐘はー?」

「 尊をすればだ。

魔獸の襲撃だ。

私も行くべきだな。」

アリシアが行こうとする。

「 姉さん武器も無いのにどうすのやー?」

あわてて英司が引き止める。

「 ! しかし私はつー。」

「 代わりに俺が行く。」

「 ! ? 何を言つているー! 」

そつ簡単に魔獸が倒せると思つたー。」

「 そういう姉さんだつて武器無じじゃ駄目だろ? だからサポートしてくれ。俺はこの世界の事がわからない。姉さんは武器が無い。」

だから教えてくれ。

今回はこの世界の実情を知るチャンスなんだ。」

「・・・むう、時間も無いし仕方がない、行くぞ!」

「おうよ!」

第十七話 今更ながら何故に（後書き）

説明回でしたね。

次話は一応出来てるので、あまり遅くはならないです。

ではまた

第十八話 へへっ、あんたも此方の人だったのかい？（前書き）

姉さんのターン！

では

第十八話 へへっ、あなたも此方の人だったのかい？

アリシアと英司は魔獸が来たという場所へ向かつて走っていた。

走りながらアリシアが英司に話しかける。

「エイジ殿、ただ楽しく生きる、というのなら、魔獸などほつとして遊んで暮らせば良いのではないか？」
今の立場ならそれも可能だろ？」

しかし英司は笑つて答える。

「！」の先には最大級の冒険が待つていて、「！」で逃げたら乐しく無い。

その後の人生で、『あの時の俺はカツコ悪かつたなあ・・・』とか
思いながら生きて行くのはまっぴらだから。
それよりは『あの時の俺カツコいい！』とか誇りに思えるほうがいい。

俺は樂しくない事はしたくない。
ただ、楽しく生きるだけさ！』

「ふふつ・・・なるほど、それは楽しそうだ。」

「ああ、楽しいよ？」

その代わり頭の固い奴や器の小さい奴らには田の敵にされるけどね。
これがなかなかめんどくさいんだ。」

「なに、気にする」とはなこさ。
そのうちきっと理解してくれる人が現れるよ。」

「……姉さんは理解してくれないの？」

「む、そ、その・・・いいな、と思って・・・
で、でも実践するには難しいなと・・・
理解した！ 理解したからそんな顔をするなー
ほ、ほら、よーしょし・・・」

「ウワアアアン おねーちゃーん！

・・・つてやってる場合じゃなかつた！」

「！？ ゲフングエフン！

そ、そうだったな！

・・・む？ 見えたぞ！ あそこだ！」

アリシアが指した先には、崩れた城壁があつた。

そして、その外側からは、何かが暴れているような音と、

「グオオオオオオオオー！」

ところづ咆哮が聞こえてきた。

「なんだ今の一・?」

「魔獸の鳴き声だらう。

行くぞ!」

英司は、アリシアの声に従い、崩れた城壁に近寄った。

そして、そこから見えた光景に心を奪われた。

そこに広がっていたのは、ほんの少しの平地と、見渡す限りの密林、遠くで天を突く勢いで聳え立つ巨木と、どこまでも続く蒼い空だった。

そして目の前には二機の四脚ゴーレム、そして一体の魔獸が戦闘を繰り広げていた。

英司は異世界を目の当たりにした。

「・・・これが・・・これがこの世界の景色なのか・・・」

「え、エイジ殿・・・

異世界を目の当たりにしてショックを受けるのはわかる。

わかるが・・・

「クつ・・・ククク、クははははははツ、はーツはツはツはツはツは、はーツはツはツはツはツは！」

来たぜ異世界！！

行くぜ未知なる新天地フロンティア！！

俺は今！

此処に居るツ！！！」

英司のテンションは今や最高潮であつた。

「あ、あれ？ エイジ殿？
落ち込んでいたのでは？」

混乱するアリシア。

「これが・・・これが歓ばずに居られようか！

俺は今、元の世界では決して見る事が出来なかつた景色を見ている！
それも、最大級に刺激的な！…」

「そ、そうか。」

「おつとじめん姉さん。
つい取り乱した。」

「う、うむ。

まあ今日は魔導機兵隊が出てこぬから出番は無やもつだがな。」

「あれは魔導機兵っていつのか・・・」

城壁の外では、四本の足を四方に広げた平たいボディに、重機のようないわゆるアーム、剥き出しの武装ラックのようなパーツが載っている。全高は7メートルほどだろうか。

アームにランプと橋のようなものを装備しているのがおそれく隊長機だつ。

柄の長いランスを取り回して、魔獸を翻弄してくる。

魔獸は、何処と無くサイに似ていた。

トカゲのような鱗、頭と一緒に一体化した一本の角、いや、頭がまるで杭であるようなフォルムだ。

十メートルにせまる少しずんぐりした体格からは想像もつかないようなスピードで突進していく。

しかし、三機の魔導機兵に翻弄されて攻撃を当てる事が出来ないでいる。

「あれが我が国が誇る最新兵器だ。」

アリシアがどこか不満そうな顔で呟いた。

「どうしたの姉さん。

そんな不満そうな顔して？」

「……どう見えるか？」

「うん。

なんかいつ・・・理想と違う・・・みたいな顔？」

「…?

・・・よくわかつたな？」

「…?

・・・当たつてたのか・・・

「あてずっぽうだったのか！？」

「じめん。

でもなんか『むむむウツ』って顔してた。
なんかあったの？」

「・・・はあ・・・

実はな、私は幼い頃魔獸に襲われたんだ。

もう駄目だ、と思った時、当時の魔導機兵に助けられた。

当時、まだ騎士団は寄せ集めの部隊だった。

その中に、発掘された古代の大型魔導機兵がいたんだ。

私と魔獸の間に颶爽と割り込んだその後ろ姿が今でも目に焼き付いているよ。」

英司はまさかの大型魔導機兵体験談に驚愕していた。

「そ、その魔導機兵は今何処に！？」

「旧型はお払い箱だとさ。

皇宮のどこかにあるらしい。」

「そうか・・・」

「全く、私はあの人型に乗る、その為に騎士団に入ったというのに・・・

入つてみればあんなものはオモチャだなんと言われてな・・・
すまない、つまらん話を聞かせたな。
忘れてくれ。」

「・・・まあか姉さんまで」ちら側の人間だったとはな。」

「？ なんの話だ？」

「姉さん、今でも人型に乗りたい？」

「・・・乗れるのであれば、な。

しかしもうそんな機会も無いだろうが・・・な。」「

「・・・つまらない事言つなよ姉さん。
もう諦めるのか？

姉さんの事力ツコいいと思つたから“姉さん”と呼ぶ事にしたんだ！
がっかりさせないでくれよ！

あの日の言葉は嘘だつたのかよ！？」

「！？」

す、すまない、私とした事が・・・

いや私がエイジ殿に出会つたのは今日が初めてのはずだが！？」

「まあそんな事はどうでもいい。
周りに流されて夢を諦めるの？
人生やりたい事やつた者勝ちだよ？」

「・・・そうだな・・・私は諦めていたのかもしけん・・・

しかし……私はこれから一体どうしたが……

「姉さん、生きている限り次がある。

諦めなければ道は開けるわ。」

「私を……私をまだ“姉さん”と呼んでくれるのか？」

「姉さんは諦めないんだろう？
なら、姉さんが姉さんらしく生きる限り、“姉さん”は“姉さん”
で……」

「う、ううう……ハイジビのおつ……」

感極まつたアリシアは、ハイジに抱きついた。

「ちょ！？ ね、姉つーいつー？ よ、鎧が痛いー痛いくて！？」

英司はしばらくアリシアにもみくちゃにされた。

「……姉さん、落ち着いた？」

「す、すまないハイジ殿。わ、私としたことが……」

「それとね、姉さん。

人型が無いなら……作ればいいんだよ。」

「…？」

「…た、たしかにそうだが…」

「姉さん、一緒に人型を作らないか？」

そう言って英司は手を差しのべた。

「…・何故・・・何故エイジ殿は今日会つたばかりの私にそこまでしてくれるのだ？」

「もちろん、楽しいからさ！

あと人型には俺も興味がある。

それに、姉さんが楽しんでくれれば俺も楽しい。」

「…・フフツ、それは楽しそうだ。」

アリシアは微笑みを浮かべると、英司の手を取った。

第十八話 へへっ、あんたも此方の人だったのかい？（後書き）

魔獸と魔導機兵が空氣つすね・・・

ではまた、・・・で、できるかぎり近づけり・・・

第十九話 ボクつ娘の本気、見せてみるオー！（前書き）

この筆者更新遅いだろ?
今回は早いほうなんだぜ？」れ。

・・・すいません。

前回のあらすじをば。

英司「アハハ」

アリシア「ウフフ」

・・・いつちやいつちや

魔導機兵・魔獣「解せぬ。」

では。

第十九話 ボクつ娘の本気、見せてみろオー！

「フフツ……それは楽しそうだ。」

アリシアは微笑みを浮かべると、英司の手を取った。

「…………」「

見つめあつて手を握り合つ二人。

・・・・・
アリシア・・・

先に首を上げたのはアリシアだった。

「・・・え、エイジ殿・・・そ、その・・・なんていうか・・・は、
恥ずかしいのだが・・・」

「姉さんから握つたんじゃないか。」

そう言つて英司が手をはなすと、なぜかアリシアは残念そうな顔をした。

「? どうしたの?」

「な、なんでもないぞ？」

「？」

その時、二人の後ろからユニーとルセリナが追いかけてきた。

「……エイジ！」「人とも！」

「……何をしてたの？」

「な！？ な、なんにもしてないぞ！？
手が離れて残念とか思つてないぞ！？」

アリシア大慌て。

「……エイジ、キミって人は……」

なぜかジト目のユニー。

「？ なんの話？」

話が見えてない英司。

その時、四人の背後で魔獣の断末魔の悲鳴が響き渡った。

見ると、魔導機兵が槍で止めを刺したところだつた。

「いつの間にか終わってるな・・・」

と英司が呟く

「まあ珍しく一頭だつたからな。
はぐれだつたのだろう。」

アリシアもほつとした様子だ。

誰もがこれで一段落だと思ったその時、森が地響きを上げた。

「なんだつ！？」

魔獸の群れが押し寄せ、滅びの音が響く。

最初の一頭は斥候だつたのだ。

かつてない規模の大群を従えた魔獣の王が現れる。

英司たちの居た城壁から見えるのは、視界を埋め尽くす魔獸の群れだった。

眼下の魔導機兵は体勢を立て直す畠で早々に城門へ引っ込んでしまった。

「！」こんな・・・これではもつ・・・
この国は終わりだ・・・
せっかくエイジ殿のおかげで新しい生き方を見つけられたと思った
というのに・・・」

「そ・・・そんな・・・
わたしあんまりエイジさんと絡んでないのに・・・
こ、こうなつたら、死ぬ前にエイジさんと・・・」
「ほ、ボクも・・・」

アリシア、ルセリナ、ユニー三人は、突然の避けられそうもない國家壊滅の危機に、衝撃を隠せずにいる。

「どうやら俺の出番のようだな！」

そんな中、英司一人がテンションを上げる。

「諦めるのはまだ早いぞ？」

「出来る事をやるひせー？」

「！？」

・・・そうだな。

私はさつき諦めないと決めたばかりだというの……ふつ、そうだ、私とて剣が無くとも魔術がある……私はまだ戦える……」

「ボクにもエイジと作った新しい杖がある！一人なら厳しいけど、エイジがいるなら！」

「・・・そうですね！」

魔術は皇族のたしなみです。

サポートなら！」「

それぞれ虚勢ではあるが精神的な復活を遂げる。

「よく言った！」

「とりあえず姉さんと俺で前衛、リナとユニーで援護でいい？」

「異議無し！」

「じゃあとりあえず姉さんには剣をあげよ。」「

「ハイジ殿、ビリにそんな物が？」

「ふつ、行くぞファア！」

「了解じゃあるじー！」

英司は右手の掌を地面に向け差し出し、そして叫ぶ。

「飛塵鉄砂！
そうけんじんさ！」

刹那、風が狂い、渦を巻く。

巻き上げられた砂が、音を立てて擦れ合へ。

下を向いた掌の中に砂鉄が集まり、赤熱してその形を変える。

凄まじいマナが凝縮し、ついには金色に輝きだす。

内部では高密度な多重構造が一瞬で作り出される。

強度に影響を『えな』よつ配慮しつつ、一気に温度を上げる。

わずか十秒あまりで、英司の掌には漆黒の大剣が握られていた。

「はい、姉さん。」

「・・・もう驚かないぞ。

なんだかエイジ殿を見ていたら、魔獸の群れなど大したことない気がする。」

「ボクもだいぶ前にそう思つたよ・・・
なんで忘れてたんだろ・・・」

「さすがエイジさんです！」

「兵士を出せ！

武器を変形せろ！

作戦を再構築して立ち上がり！

剣を拾つて反撃しろ！

さあ、夜はこれからだ！

ハリー、ハリー、ハリー！ハリー！ハリー！！」

「しつかりしてエイジ、今は昼だよ！？」

「さあ往くぞ！
悲鳴を上げる・・・
ブタのようつなアツ！！」

「エイジ！？ しつかりしてエイジ！――」

・・・英司も結構テンパつてたようだ。

「おっといかん、気合い入れ過ぎた。」

もう魔獸は目前に迫っている。

「フイア！」

「【テスラクト ランサー】じゃー！」

英司の手元に長大な対物ライフルが召喚される。

「徹甲散弾だ！
派手に行くぞ？」

「了解じゃ！
ろービーとかーとりつじー！」

ガシュン！

カートリッジが装填される音が響く。

ライフルと言つよつはキャノンと呼ぶべき口径のバレルが鈍く光つ
ている。

銃床部には斥力場発生術式による衝撃緩和ユニットが搭載されてい
る。

何をするにも大量にマナを消費する贅沢な仕様だ。

正式な名称は、複合魔導加速狙撃砲“デストラクト ランサー”だ。
製作した本人が名付けた。

搭載されたマナコンデンサに、膨大なマナを限界まで流し込む。

そして、トリガーを引き絞った。

ドガツツツツツツ！－－－！

轟音を立てて閃光が迸る。

銃口から飛び出した散弾はそれぞれが、英司の魔力によるマナとフニアが編み上げた術式によつて生み出される圧倒的なエネルギーを纏つて駆け抜ける。

通常の散弾ならば、銃口を飛び出した直後に燃え尽きる速度と温度だが、魔導鍛造されたアーマンタイト製の散弾は空気摩擦と術式の熱量など物ともせずに標的を貫通する。

結果、発射した瞬間に魔獸の第一波の約七割、二百体あまりを吹き飛ばした。

「……………」

見ていた三人は驚愕している。

ついでに言うと、離れて見ていた兵士や一般人たちも驚愕していた。

「よつねーーばりば！」

「や、 やすがエイジ殿！

「これなら国を救えるかもしない！」

「いや、今のあと一発しかないんだ。」

「なつー？ なぜー？」

「あれは散弾一発一発を丁寧に仕上げないといけないんだ。
適当にやるときれいにバラけないし当たる前に燃え尽きるしね。
といつわけ。」

「 」

「まあ他にも色々あるし、笛も手伝ってくれるんだろう?
なんとかなるさー・・・ 分」

「そんな適當な・・・
まあしようがないか。
エイジだもんね。

それじゃあ、ボクの本氣、見せてあげるよー。」

そう言つてユニーは杖を構えた。

右手でグリップを握り、左手で柄を握っている。

ユニー監修のもと、英司とフライアが作り上げた杖、“可変式魔導機械

杖”試作型『フレスベルグ』（命名、英司）だ。

見た目としては、長い柄の先端下部にP90アサルトライフルがくつついているような・・・と言つべきだろうか。

「ついに”Jの子”（フレスベルグ）の御披露だね。」

ユニーはベルトに差していた小瓶を抜き取ると、杖の先端に装着した。

「風よ！集いて火種を運べ！」

ユニーが詠唱しながらトリガーをひくと、杖に装着された小瓶がはじけ、中身を前に飛ばす。

小瓶に詰まっていたのは、小分けにされた薬品だった。

詠唱により、杖にまとわりついていた風が、それを一瞬で運ぶ。

ガロン・・・ガキュツ！

内部に搭載されたリボルバー拳銃のようなシリンドラーが回転し、マナカートリッジが装填される。

「燃やせ、燃やせ、悉く焼き尽くせ！

猛り狂う業火の海！！」

フレスベルグを触媒に広がった魔力がマナを制御下に置き、マナは分子に干渉して急激に振動させ、熱量をはね上げる。

カートリッジ内部に凝縮されていたマナを一気に解放することにより、瞬間的な出力をさらに上乗せした。

ドオツツツツツツツツツツ

轟音と共に、ユニーの正面から放射線状に45。の範囲内にいた魔獣、およそ50体あまりが紅蓮にのまれ、一瞬で灰と化した。

元々は広範囲を炎で覆い、肺を焼いて窒息死させる対生物範囲殲滅攻撃だったのだが、この“フレスベルグ”によって広範囲焼夷殲滅攻撃へと変化したのだ。

「まだだよーー！」

しかしユニーの攻撃は終わらない。

右手のグリップの根本にあるタブを指先で押しつつ、左手に握っている柄を本体から引き剥がすように起こすと、そのまま先端部を軸に半回転させる。

ガキュン！

接続部が引き込まれ、先端下部に搭載されていた魔導核と接続される。

そう、長い柄は延長用のロングバレルだったのだ。

バレル本体は一重構造により外殻となる柄から独立しており、外部の影響をほとんど受けない。

アーダマンタイト製といつこともあり、フルスイングで叩きつけても歪み一つできない。

カキヤツ！

柄の石突き、すなわち銃口が解放される。

ユニーは銃底を肩に当てて構え直すと、照準を覗きこむ。

ガロン・・・ガキュ！

再びカートリッジが装填される。

「もうひとつ！」

ブン！－

トリガーが引かれ、銃口から弾力の弾丸が放たれる。

空気中において、魔力による制御下になければ、凝縮したマナは極めて短時間で霧散してしまつ。

その為、魔法、魔術においては、おのずと射程距離が決められてくる。

“フレスベルグ”（狙撃形態）は、“純粋な魔力による直接攻撃”を目的とした形態である。

魔力を絞り込み、指向性を持たせ爆発的に展開、発生した弾力により標的を貫通させる。

その為、他の魔力を使った攻撃と比べて圧倒的な射程距離と貫通力を誇る。

副次的な効果として、射線上のマナが同時に駆け抜ける為、ただの貫通ダメージではすまされない。

また、本体内部で発動させた魔術や各種実弾を乗せて撃ち出し、追加ダメージを狙う事も可能だ。

不可視の弾丸が、辛うじて生き残った魔獸の眉間に撃ち抜く。

その魔獸は声も上げずに絶命した。

ガロン、ガロン、ガロン

ガキュ！ガキュ！ガキュ！

ヴン！…ヴン！…ヴン！…

シリンドラーとカートリッジの作動音、鈍い射撃音と共に、生き残った魔獸の眉間を撃ち抜いていく。

魔獸の第一波が全滅するまで、そして時間はからなかつた。

第十九話 ボクつ娘の本気、見せてみるかーー（後書き）

ではまた。

・・・は、はやく更新出来ぬよ! じがんざるよ~。

・・・ほんとだよ~。

第一十話 ウィップ・・・と、呼ぶべきだらうか？（前書き）

非常に遅くて申し訳ありませんでしたーっ！！

恐らくみなさん前の話覚えてないと戻つので、前回までのありあじ。

ゴー「これが今のボクの全力全開！」

ド「オオオオオッ！！

英司「高町式会話術！？」

では。

・・・やうござんば告知も無くタイトル一回変えました。
すこません。

第一十話 ウィップ・・・と、呼ぶべきだらうか？

ユニーと英司は一通り狙撃で魔獣を片付けた。

「・・・ボクはそろそろきついかも。
・・・少し休ませてもらつていい？」

ユニーも少し疲れたようだ。

本来、あれほどの規模の攻撃を一人で行うなどまず不可能であり、この世界の常識からすればかなりの非常識である。

いくらフレスベルグが優秀とは言え、そんな攻撃を単独でこなしておいて『少し疲れた』で済ませられるのは、ユニーが優秀だからに他ならない。

「ああ。第一波が来るまで休んでな。」

「うふ。そうさせてもううね。」

「いや、驚いた。
今日は驚いてばかりだ。
なんだその杖は？」

相変わらず驚いてばかりのアリシア。

「えへへ、ボクとエイジの合作なんだ」

フレスベルグを見つめて、『三三三三三三三』。

「あ、あるで！」

エイジさん！わたしにも！わたしにも何か作ってください！！

え、エイジ殿！そういえば私の武器を修理改造してくれるという

英司に詰め寄るルセリナとアリシア。

「あー・・・まあこれが一通り終わつたらな。」

「約束ですよ！？絶対ですよ！？」

「私もだぞエイジ殿！？」

「……世の中に絶対などあつはしないのだよ。」

「ずるいですエイジさんー..?」

「ずるいぞエイジ殿ー!?

「書いてみただけだよ?」

「何故!?
なにそれ

などと話してくるつむこ、第一波が迫つて来ていた。

「そいじゃ姉さん、行きますか!」

「つむー.」

城壁から飛び降りる英司とアリシア・・・と、見せかけて、2人とも空中を駆け抜ける。

「風の加護!」

「光の翼ー.」

アリシアは集めた空気の塊を足の裏から連続で噴射させて走り、英司は光の翼を展開させて飛んでいた。

やがて、魔獸の目が覗けるほどに近付いた。
様々な種類の魔獸が入り交じった混成部隊のようだ。

「フィア！」

「『ツヴァイザンバー』！」

英司の右手、フィアの腕輪が輝き、その手に握られていた長大な対物ライフルが消え、残ったグリップが細長く変形する。
そして次にグリップに現れたのは、幅の広い鎧だった。
続いて左手にも同じように柄と鎧が現れる。

キィイイイイン！！！

埋め込まれたクリスタルが唸りを上げる。

「飛塵鉄砂！」

風が巻き起こり、砂鉄を巻き上げる。

巻き上げられた砂鉄は、音を立てて集まり、両手の柄に大剣の刃を形作る。

刃幅20センチ、長さ1メートル50センチはあるつかという大剣だ。

先ほどアリシアに渡した大剣のときのよつこマナが凝縮し、刀身が金色に輝きだす。

しかし、一向にその輝きが収まらない。

むしろよつ一層まばゆく輝きだす。

黄金に輝く双大剣。

その正体は、極限まで密度を高めたマナを込めたアダマンタイトだ。本来ならばいくらアダマンタイトといえど耐えきれず自壊してしまう。

それを強大な魔力により強引に押し留めているのだ。

ザアッ！！

風を巻いて、まるで翼を開くように両手を左右に開いて引き絞る。

その状態から、一切体幹をぶれさせずに剣を振る。魔力・・・斥力による補助があつて初めて出来る芸当である。

正面から迫る魔獣をすれ違ひざまに右手の大剣で一枚に下ろす。

甲殻の厚い突進型の魔獸をあつたりと斬り倒す。

魔獸の防御力は、単純な甲殻の物理防御のみではない。

その甲殻は魔導効率の良い魔導素材であり、その構造を常に発生させた斥力により支えている。

さらに外向きの縦圧縮された斥力場を纏う事により、その身に触れる事すら困難である。

それを破るには、斥力場を維持出来ないほど衰弱させるか、その斥力場を上回る斥力、あるいは質量を叩き込むしか無い。

今回の場合、あまりにも強大だった英司の魔力が魔獸の魔力を圧倒的に上回った上に、強化され加速された高熱の大剣の質量と熱量という物理攻撃力が、魔獸の魔力、物理防御力を上回った、当然の結果と言えるだろう。

まるで踊るように金色の双大剣を振るう英司。

その背中を守るように漆黒の大剣を振るうアリシア。英司に負けず劣らず、卓越した魔力操作で大剣を操り、一撃で効率良く急所を潰して倒していく。

それはまるで、幻想的な英雄譚の一コマのようであった。

しかし英司の無双はこれで終わらない。

刀身をさらに加熱、マナを増加させ、刃をプラズマ化せる。

そのプラズマの刃はまるで生きているかのように蠢き、魔獸を切り刻み始める。

切り刻んだ物質を材料としてプラズマ化させ、刃を延ばす。

プラズマ化した刃を、縦圧縮した内向きの斥力場で包み、形を持たせているのだ。

内向きの斥力場に触れた物質は内部に引き込まれ、その高压、高熱、高電圧にさらされて瞬時にプラズマと化す。

周囲の空氣や攻撃対象を削り取つて取り込み、その構成要素としながらその刀身を延ばしていく。

ついには英司が動かなくとも、イメージするだけで長大な刃が縦横無尽に暴れ回り、魔獸をまとめて葬り去っていく。

ザガガガガガガガッ！！！

光の帯が戦場を駆け巡り、後に残るのは切り刻まれ焼き払われた魔獸の残骸だけだった。

やがて、第一波の魔獸は全滅した。

役目を終えた光の刀身は、一瞬激しく輝くと、その身をほどいて消えていった。

出番をほとんど英司にとられたアリシアがいじけている。

「え、エイジ殿！　これでは私の出番が無いのではないか！？無いではないか！？」

大事な事なので一回書くアリシア。

「せーら、よーしょしょしょしー。」

某動物王国の王風にわしゃわしゃする英同。

「うょ！？　え、エイジ殿！？　や、やめ・・・んつ・・・」

そう囁かれて手を止める英同。

・・・なぜかアリシアは残念そうな顔をしていた。

城壁の上では、ルセリナがが英同とアリシアを見つめて落ち込んでいた。

「わたし最近ホント空氣です・・・」

「エイジー！」

第三波が来るよーっ！」

遠くを観察していたユニーが叫ぶ。

「むー？ 姉さん、 第三波がくるぞー！」

「・・・はつー！？」

一旦城壁まで戻る英司とアリシア。

その時、不気味な笑い声が響いた。

「ふつふつふ・・・！」はわたしに任せてもらおうかー！」

「「「ー？」」」

その不気味な笑いの正体はルセリナだった。

「皇女が伊達では無いとこ見せて殺りますー！」

「物騒だなオイ。」

「征きますーー！」

「無視か」

何言い出したんだこいつ、という視線の中、ルセリナは祈るように指を組み、右手人差し指の指輪を額に当てる。

そして目を閉じると、静かに唇を開いた。

第一十話 ウィップ・・・と、呼ぶべきだらうか？（後書き）

次回・・・いつになるかわからないけど見捨てないでくれると嬉しいです！

では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5367o/>

異界とあとえーっと・・・~大いなる魂の器~

2011年7月8日01時59分発行